

宮城県栗原市栗駒猿飛来

鳥矢ヶ崎古墳群測量調査報告

辻 秀人・安達 訓仁・佐々木拓哉・森 千可子



巻頭写真 B地区 中心部分

調 査 体 制

調査期間 第1次調査 平成24年3月7日～15日、3月28日～31日
第2次調査 平成25年3月6日～10日、3月27日～31日
第3次調査 平成26年3月3日～22日、3月28日～31日

調査主体 東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナール

調査担当 東北学院大学文学部 教授 辻 秀人

調 査 員

第1次調査

熱海泰輔・千葉優菜（4年）

佐々木拓哉・成田 優・服部芳治・星野剛史・松本尚也・森田彩加・
横田竜巳・吉田龍司（3年）

日谷 旭・石橋咲紀・菅原健太・高橋萌子・武田翔平・名久井伸哉（2年）
芦野 悟・岸 知広・廣瀬拓磨（1年）

第2次調査

佐々木拓哉・横田竜巳（4年）

日谷 旭・石橋咲紀・菅原健太・高橋萌子・武田翔平・名久井伸哉（3年）
芦野 悟・阿部大樹・岸 知広・佐々木雪乃・澁谷若菜・東海林裕也・
新保摩実・菅原里奈・廣瀬拓磨・森千可子・結城彩花（2年）

第3次調査

佐々木拓哉・横田竜巳（大学院博士課程前期1年）

日谷 旭・石橋咲紀・菅原健太・高橋萌子・武田翔平・名久井伸哉（4年）
芦野 悟・阿部大樹・岸 知広・佐々木雪乃・澁谷若菜・東海林裕也・
新保摩実・菅原里奈・廣瀬拓磨・森千可子・結城彩花（3年）
相川ひとみ・泉澤まい・笠原大暉・鈴木里奈・野呂夕奈・星あゆみ・
村木 翔（2年）

調査協力 栗原市教育委員会 猿飛来コミュニティセンター、

鳥矢ヶ崎史跡公園保存会

千葉長彦、大場亜弥、安達訓仁、工藤 健、佐藤 茂（敬称略）

例 言

- 1、本報告は平成24年から平成26年まで実施した宮城県栗駒町猿飛来に所在する鳥矢ヶ崎古墳群の測量調査成果をまとめたものである。
- 2、測量調査は調査は東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナールのゼミ活動の一環として実施したものである。
- 3、調査は東北学院大学文学部教授辻秀人が担当した。調査の主な参加者は考古学ゼミナール所属学生、所属予定の学生及び参加を希望した歴史学科1年生である。
- 4、現地での図面作成は参加者全員で行い、作成図面の整理統合、デジタルトレース等は佐々木拓哉（大学院文学研究科博士課程前期2年）、森千可子（歴史学科4年）を中心に平成26年度辻ゼミゼミナール所属歴史学科4年生が実施した。
- 5、本報告の編集は辻秀人が担当した。大部分の執筆を辻が担当したが、昭和46年の発掘調査で出土した遺物の実測図および記載は栗原市教育委員会安達訓仁氏によるものである。
- 6、本報告に掲載した図面の高さ表示はすべて海拔高、北はすべて真北を示す。
- 7、本報告に掲載した平面図の位置は、便宜的に局地座標系により表示した。局地座標のX、Y座標は調査にあたって設置した基準点T1（国家座標 $X=-131889.046$ $Y=14885.611$ ）を $X=100.00$ 、 $Y=100.00$ とした。X軸は真南北方向、Y軸は真東西方向である。
- 8、本報告に掲載する鳥矢ヶ崎古墳群航空写真はすべて工藤健氏が所有するものである。工藤氏のご厚意により本報告に掲載させていただいた。



写真1 測量調査風景

第1章 調査に至る経過

鳥矢ヶ崎古墳群の所在地には古墳群に関わる言い伝えが残されている。鎌田金穂氏によれば(鎌田 2004)、「明治四十四年というから今を去る六十三年前の六月十三日、旧尾松村八幡の大工、小野寺久五郎さんが、青雲山を越え源四郎道にさしかかった際、つつじの株につまづき下駄を探していた時、土中から刀の折れ端のようなものが五寸ほど露出していたのを掘起して家に持ってきた。その夜枕神が立ち「あれはおれのものだから掘り出せ」とのお告げにより、翌朝早く現地に行き掘った処、唐くつわ(鉄製衣馬のくつわ)その他鎧、かぶと、刀、須恵器の茶碗、皿等約四キロが出土したので屋根裏に保管していた。内唐くつわは東京国立博物館へ納め」という伝えである。昭和37年には小野寺久五郎氏の案内で現地を訪れたが、その場所は確認できなかったという。

このような状況を踏まえて、栗駒町教育委員会は東北大学高橋富雄教授、東北学院大学加藤孝教授らに調査を依頼、両教授は快諾し、栗駒町教育委員会教育長を調査責任者とし、高橋富雄教授、加藤孝教授に加えて築館女子高校教諭金野正氏、宮城県第二女子高校教諭氏家典氏らを調査員とする調査団が結成された。発掘調査は昭和46年3月20日～3月27日の8日間実施された。調査には東北学院大学考古学研究部員29名とOB2名合計31名が参加している。調査団には当時第一線で活躍していた研究者が名を連ねており、参加した考古学研究部員も後に考古学専門家として活躍した人が多い。当時最高の調査団が調査にあたったといえよう。

調査の成果は大変豊かなものだった(栗駒町教育委員会 1971)。1号墳、2号墳の2基が発掘調査された。1号墳からは東北北部の末期古墳と共通する特徴を持つ石室が、2号墳からは木棺が直接土中に埋納された状態で発見され、「中央系高塚古墳の辺境形態」と考えられた。また、2号墳の木棺からは金銅製銚帯金具が一式出土し、帯本体は消失しているが、律令国家の役人が公式の場で身につける帯が埋納されていたことが判明した。他に蕨手刀、刀子、土師器、須恵器などが出土している。

調査の結果、鳥矢ヶ崎古墳群には北の要素と中央の要素が混在していること、被葬者には当時の律令国家の役人であった人物が埋葬されていることが判明し、当地が伊治城で反乱をおこした伊治公岩麻呂の一族が基盤とした地域と見られることもあわせて、東北古代史を考える上で大変重要な知見をもたらすこととなった。

多大な調査成果を受け、鳥矢ヶ崎古墳群は昭和48年11月6日に宮城県史跡に指定された。また地元猿飛来では鳥矢ヶ崎古墳群史跡公園保存会が結成され、発掘調査終了後10年ごとに記念行事を開催するなど、鳥矢ヶ崎古墳群の重要性を世に伝える活動を展開する一方、古墳群に生い茂る雑草の刈り払い、古墳群全体にわたる桜の植樹、史跡公園駐車場、あづまや等の整備と管理に尽力されてきた。

本報告執筆者の一人である辻は、発掘調査三十周年記念講演会に講師として招かれ、鳥

矢ヶ崎古墳群の現況を目の当たりにすることになった。発掘調査が終了した遺跡では、特別に行政が予算をかけて管理するケースを除けば、遺跡に足を踏み入れることさえ困難な場合が少なくない。しかし、鳥矢ヶ崎古墳群は見事に清掃、管理されており、古墳群が築造された当時そのままの姿が目の前に広がっていた。聞けば毎年地域の人々が総出で定期的に清掃、刈り払いが行っているとのこと、地元の方々の熱意が遺跡を守っていることを実感した。一方、古墳群の様相は予測を超えたものだった。刊行された報告書にはもっぱら A 地区の様相が記載されており、B 地区については十分な認識をえられていなかった。しかし、現地に望めば、鳥矢ヶ崎古墳群の中心は B 地区にあることは一目瞭然だった。残念ながら、これまで鳥矢ヶ崎古墳群の存在とその価値は学会では十分には知られていなかった。その理由が古墳群の全体像が提示されていないことにあるという思いはその後現地に足を運ぶたびに強くなっていった。

辻が主宰する東北学院大学辻ゼミナールは、2011年3月11日の東日本大震災と原発事故により、それまでフィールドにしていた福島県浜通り地域の調査が不可能になったことを機会に、鳥矢ヶ崎古墳群の歴史的な重要性を伝えるため、2012年より鳥矢ヶ崎古墳群の全体像を示す測量図を作成することとした。

引用文献

- 鎌田金穂 2004 「宮城県指定鳥矢ヶ崎古墳」『青雲の郷 猿飛来を語る』 鳥矢ヶ崎史跡公園保存会
 栗駒町教育委員会 1971 『宮城県栗原郡栗駒町鳥矢ヶ崎古墳調査概報』 昭和四十六年度栗駒町埋蔵文化財報告



写真2 鳥矢ヶ崎古墳群から見た栗駒山

第2章 遺跡の環境

鳥矢ヶ崎古墳群は、宮城県栗原市栗駒町鳥矢崎字猿飛来に所在する。奥羽山脈から派生する南東に延びる丘陵の痩せ尾根上から南斜面にかけて分布する。古墳群西端からは写真2のように栗駒山を望むことができる。

鳥矢ヶ崎古墳群が所在する現在の栗原市域は、古墳時代から古代にかけて東北北部と東北南部の文化の境界にあたり、歴史的に様々な事象が起きたことが知られている。

古墳時代には東北南部の土師器を使い、古墳を築く文化（古墳時代社会）と狩猟、採集を生業とする北海道の文化と共通する続縄文文化とが境を接していた。

宮城県栗原市築館町城生野に所在する国指定史跡伊治城跡では、2条のL字形に伸びる溝が検出され、堆積土中から大量の塩釜式土師器と北大I式の深鉢が出土し、古墳時代前期に位置づけられた（築館町教育委員会 1992）。2条の溝を組み合わせて豪族居館との理解もあるが、必ずしも明瞭ではない。ただ、古墳時代前期にこの地に古墳文化を持つ人々が暮らし、続縄文文化の文物を入手できる状況にあったと見ることができる。

また、平成26年には伊治城跡の南西約500mの位置にある入の沢遺跡の大規模な発掘調査が実施され、大規模な堀と材木堀で囲まれた古墳時代前期の拠点的な集落の存在が明らかにされた（宮城県教育委員会 2014）。入の沢遺跡の西側の尾根上にある大仏古墳群は入の沢遺跡との関係が考えられている。伊治城跡の北西約3kmにある長者原遺跡の存在とあわせ、この地域には古墳時代前期において古墳文化を持つ集落の広がり認められ、北の続縄文文化と相対して様相を確認することができる。入の沢遺跡の大規模な防御施設の存在を考えると、古墳時代前期において古墳時代社会と続縄文社会との軋轢がこの地にあった可能性があるのだろう。

古墳時代中期～後期はこの地の遺跡は明瞭ではない。奈良時代にいたり、再び大規模な遺跡が確認されるようになる。

伊治城は、東西700m、南北900mの範囲を土塁と大溝で区画し、内部に政庁を設ける大規模な施設で、767（神護景雲元）年に律令国家の東北北部への進出の足がかりとして築かれた。伊治城建設に先だって関東の人々の移民が行われたことが伊治城の南約2kmの御駒堂遺跡で確認されている（宮城県教育委員会 2014）。また、墳墓では姉菌横穴群、大沢横穴群が営まれた。横穴として簡略化され新しい段階のものである。在地の墓制ではなく、移民と関係する可能性が高い。両横穴群は内陸では最北の横穴群である。

鳥矢ヶ崎古墳群が営まれた奈良時代には、南東約6kmにある伊治城周辺で関東からの移民、新たな墓制の開始など伊治城造営に関わる大きな変化が進行していた。鳥矢ヶ崎古墳群を営んだ人々は歴史的な大変動に直面した。鳥矢ヶ崎古墳群には、東北北部、中でも胆沢地方の小規模な円墳で構成される古墳群と共通する様相を見て取ることができる。小規模な石室の存在も含めて、いわゆる末期古墳群の範疇で理解することができよう。

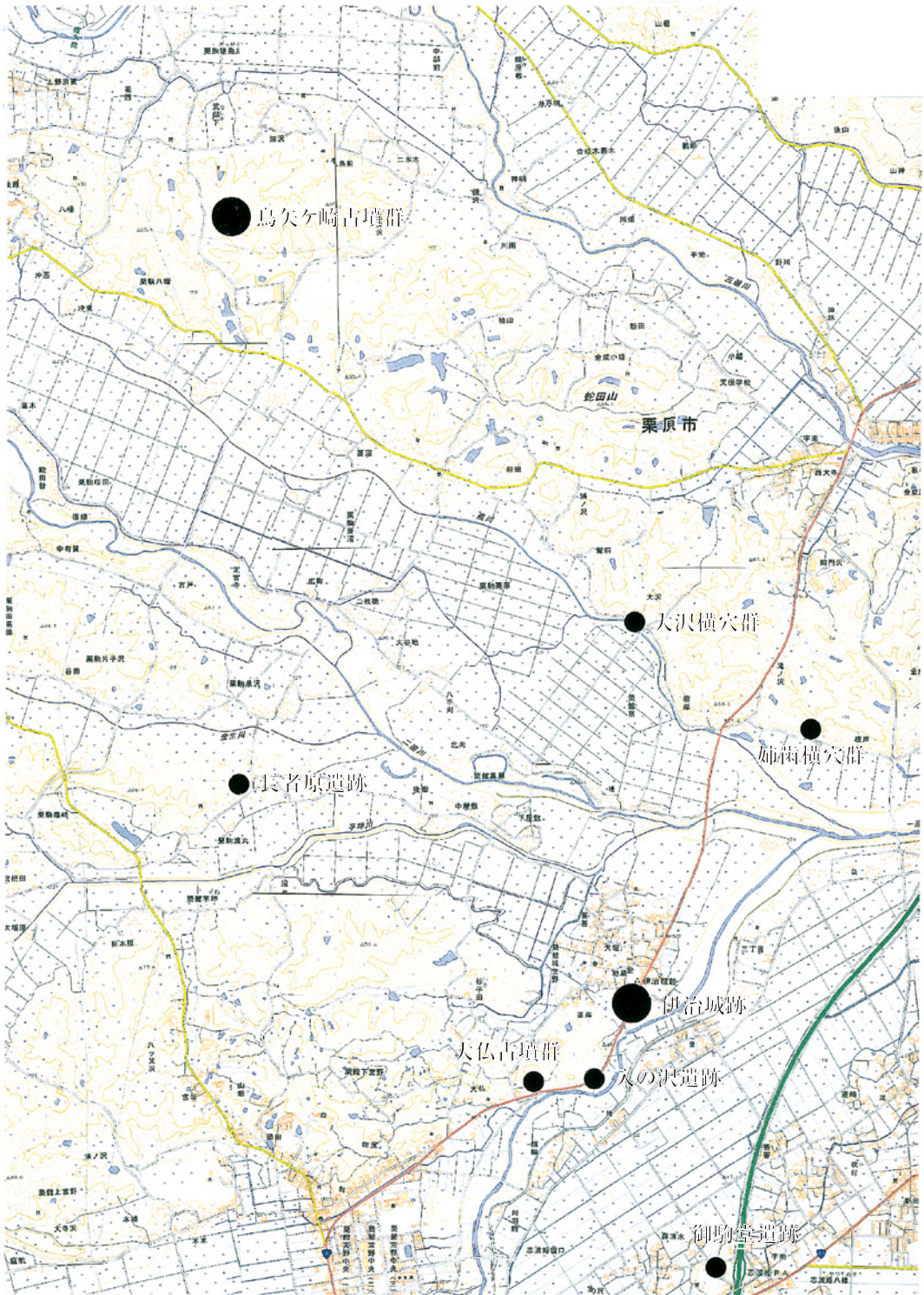
つまり、鳥矢ヶ崎古墳群を営んだ人々は、大きくみれば東北部の蝦夷と呼ばれた人々と共通する文化の中であり、この地域の在地の勢力が営んだものと見られる。しかし出土遺物には北の末期古墳群と共通する要素がとともに律令国家と関係の深い文物もあり、国家と在地勢力との緊張関係の中でこの地の人々がとった対応を示している。

引用文献

- 築館町教育委員会 1992年 『伊治城跡 ―平成3年発掘調査報告書―』
築館町文化財調査報告書第5集
- 宮城県教育委員会 2014年 「入の沢遺跡」『平成26年度遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会
- 宮城県教育委員会 2014年 「御駒堂遺跡」『平成26年度遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会



写真3 鳥矢ヶ崎古墳群（写真右下）から伊治城方向（写真左上）を望む（写真は工藤健氏提供）



第1図 鳥矢ヶ崎古墳群および周辺遺跡位置図（古墳時代～古代）

第3章 測量調査

1. 調査の方法

鳥矢ヶ崎古墳群古墳測量調査にあたって、次のような仕様、方法で原図を作成することとした。

- ・原図縮尺 墳丘分布範囲 1/20 自然地形 1/100
- ・等高線 墳丘分布範囲 25 cm ごとに記入し、1 m ごとに太線とする
自然地形 50 cm ごとに記入し、1 m ごとに太線とする
- ・作図方法 T1、T2 を基準点とし、トータルステーションを用いて XY 座標を測定し、測量基準点を作成した。なお、必要に応じて併合トラバースを作成し、測量基準点の正確性を確認している。各測量基準点から平板を用いて作図した。作図にあたっては墳端線、傾斜変換線を先に記入し、後に等高線を作成した。等高線は標高により作成した。

測量実施にあたり、GPS 測量により、基準点設置を栗原技研に依頼した。その成果は以下の通りである。

T1 X=-131889.046 m Y=14885.611 m

標高 67.765 m

T2 X=-131860.115 m Y=14925.241 m

標高 66.968 m

注 この成果は 2012 年 2 月 27 日に観測したものである。東日本大震災前、平成 20 年 6 月 14 日発生岩手宮城内陸地震後のデータと比較すると X 軸で 1.29 m 南に、Y 軸で 2.875 m 東に移動しており、東日本大震災と岩手宮城内陸地震のいずれよりも前のデータと比較すると、X 軸で 1.18 m 南に、Y 軸で 2.729 m 東に移動している。

T1、T2 の座標データは公共座標で表示されている。実際の作図作業にあたっては公共座標は数値が大きすぎ、扱いにくいので、T1 を X=100.00、Y=100.00 とし、真南北方向を X 軸真東西方向を Y 軸とする局地座標系を用いた。本報告掲載図面の表示も局地座標系を用いた。局地座標 XY それぞれの数値から 100.00 を減じた後 T1 のそれぞれの数値に加えることで、公共座標に転換可能である。

2. 古墳群の分布と形態

鳥矢ヶ崎古墳群は奥羽山脈から派生し、南東方向に伸びる丘陵上にあり、東西方向に約 250 m に渡って分布する。所在する丘陵尾根には 3 カ所の高まりがあり、各古墳はそれぞれの高まりを中心に集中する傾向がある。古墳群西端の高まりに集中する古墳は、丘陵尾

根上と南斜面に分布し、東西方向にあわせて南北方向にも広がりを見せる。中央の高まりに集中する古墳はほぼ尾根上に、東端の古墳は尾根付近と南斜面に分布する。

確認できた古墳総数は39基である。現地の標柱では他にA地区20号墳、B地区19号墳、20号墳の表示があるが、現地観察では古墳であるとの確証が持てなかったため、図には表記しなかった。しかし、墳丘が改変を受けている可能性があり、調査等で今後確認される可能性は十分に残されている（第2図）。

確認できた古墳総数39基はいずれも円墳である。

立地、周溝と墳丘の関係、墳丘形態には、以下の3タイプがある。

Aタイプ 尾根線の頂上付近に築かれた古墳で周溝は観察されず、比較的端正な円形を呈するものが多い

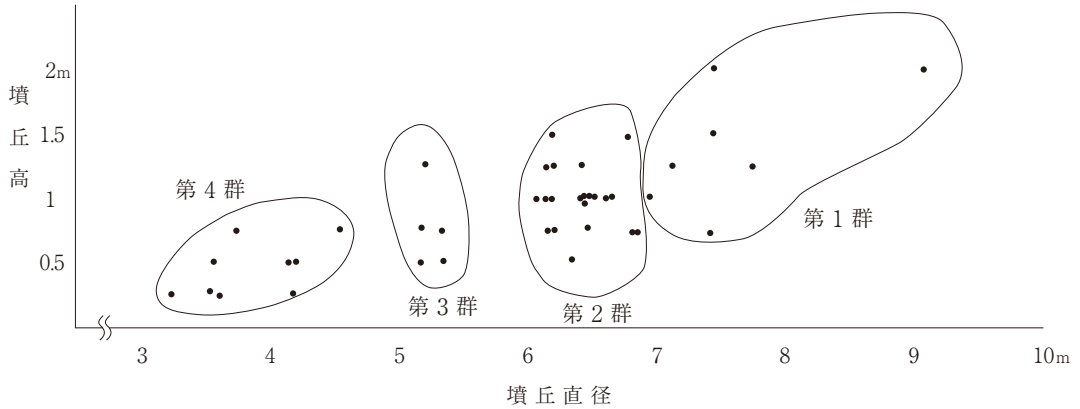
Bタイプ 尾根線上で東西方向の傾斜面に築かれた古墳には墳丘より上側の斜面を掘り込む形で周溝が掘削されている。この場合周溝は全周せず、半月形で、斜面と墳丘を区画する機能をもつように思われる。

Cタイプ 丘陵南側斜面に築かれた古墳は、墳丘の西、北、東に墳丘を取り囲む形で周溝が掘削されている。地表面からの観察による限り、斜面の下側、南側には周溝の痕跡は確認できない。墳丘は全体に1m以下が多く、低い傾向にある。墳丘の形は全体に南北方向に長い楕円形を呈する可能性がある。墳丘の土が斜面下側に流れているため可能性があり、本来の形であるかどうか検討が必要である。

各古墳の規模は第1表に示した。地表面からの観察であり、直径、墳丘高ともに確定値ではないが各古墳のおよその規模は把握することができる。また、第3図にこれら各古墳の規模をX軸を墳丘高、Y軸を墳丘直径として図に表した。

古墳名	直径	墳丘高	タイプ
A1	6.3	0.5	C
A2	7	1	C
A3	6.14	1	A
A4	6.78	0.75	A
A5	5.33	0.75	A
A6	6.14	1.25	C
A7	6.62	1	C
A8	6.2	1	C
A9	6.78	1.5	B
A10	6.49	1	C
A11	7.42	0.75	C
A12	5.33	0.5	C
A13	5.17	0.5	C
A14	7.11	1.25	B
A15	4.2	0.25	B
A16	6.14	0.75	B
A17	6.13	1	B
A18	3.23	0.25	C
A19	6.2	1.5	C
A20	欠	欠	欠
A21	5.17	1.25	C
A22	7.43	1.5	B
B1	7.75	1.25	A
B2	7.43	2	A
B3	6.46	1	B
B4	3.55	0.25	B
B5	4.2	0.5	B
B6	3.55	0.5	B
B7	6.46	0.75	B
B8	6.46	1	B
B9	5.16	0.75	B
B10	4.2	0.5	B
B11	3.71	0.75	B
B12	9.11	1	B
B13	6.2	0.75	B
B14	6.62	1	C
B15	6.14	1.25	C
B16	3.55	0.25	B
B17	4.52	0.75	B
B18	6.46	1.75	B
B19	欠	欠	欠

第1表 古墳の規模一覧



第3図 墳丘規模分布図

これらによると各古墳は直径7mを超え、墳丘高1~2mの大型墳丘を持つ群（第1群）、直径6~7m、墳丘高0.5~1.5mの中型墳（第2群）、直径5m台前半、墳丘高0.5~1.25mの小型墳（第3群）、直径3~4m、墳丘高0.25~0.75の極小墳（第4群）に分かれる。第1群6基、第2群19基、第3群5基、第4群9基を数える。第2群が最も多く一般的な規模であり、第1群は少なく、全体の中で有力な人物の墳墓である可能性が高い。第1群がすべてA、Bタイプで、尾根線上にあることもこのことを裏付けるものだろう。第3、4群は第1群の周囲にあり、第1群に従属する古墳群であると考えられる。

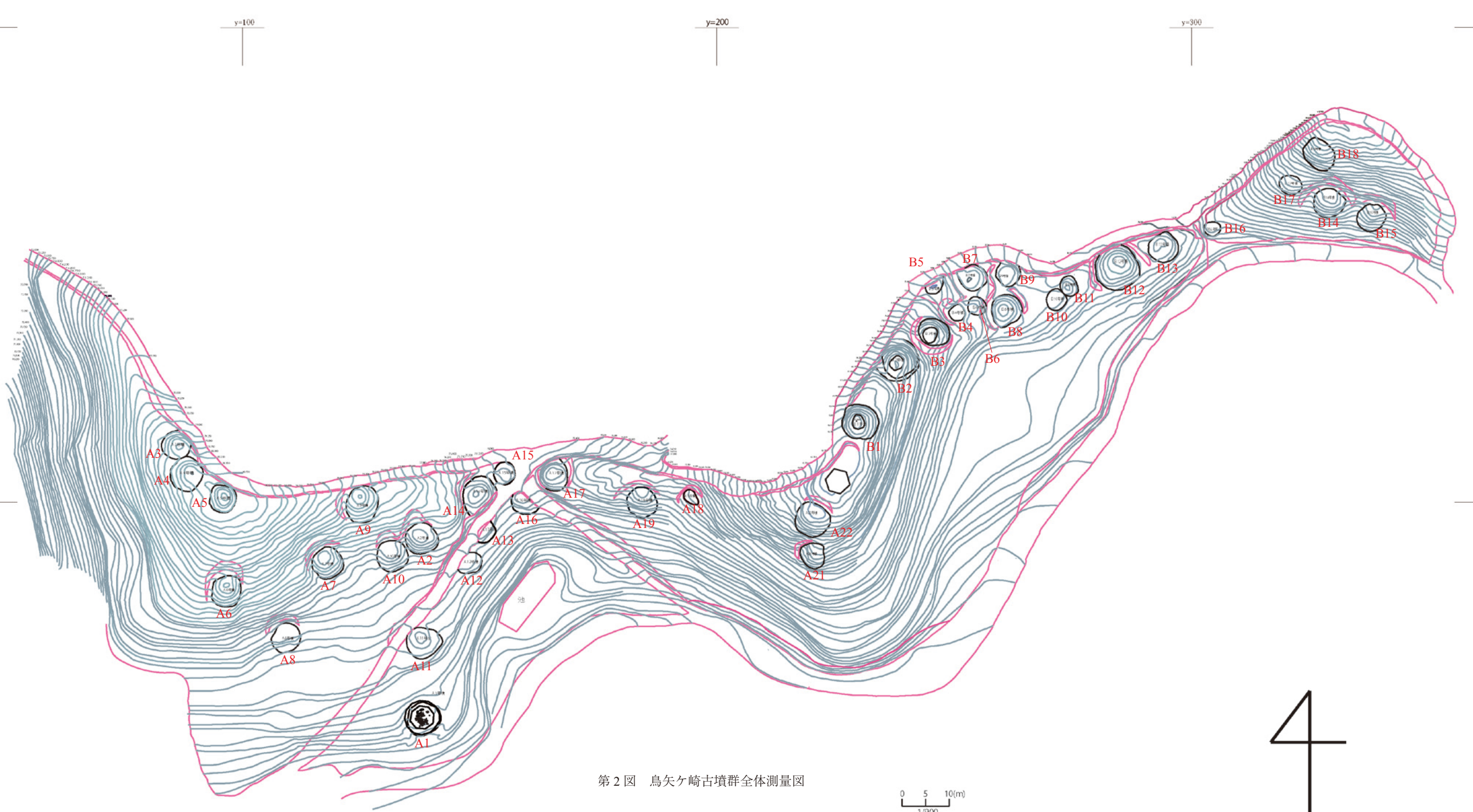
さて、鳥矢ヶ崎古墳群の分布は、第4図に示すように第1~第3グループの3区分が可能である。最も西側の尾根の高まりからいったん降り、次ぎの高まりに続く登り斜面のはじめまでに分布する第1グループ、中央の高まり付近から東に降ってもっとも低い位置までに分布する第2グループ、東側の高まり最高所付近に分する第3グループである。

(1) 第1グループ

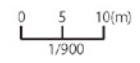
第1グループは、A1~A19号墳の19基で構成され、古墳群中で最も西側に分布する一群である。尾根線上の西側、標高80m前後の高まりから東と南に降る斜面および標高75m程度の最も低い場所から東に登り始める斜面にまで分布する。尾根南斜面上に比較的広く古墳が分布する点に特色がある（写真4）。

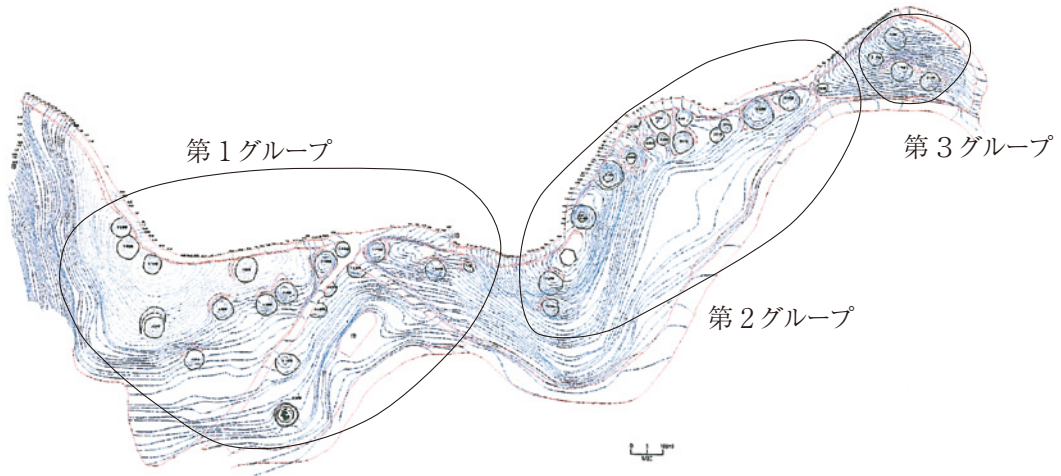
第1グループは、古墳群西端の一群であるが、詳細にみれば西側尾根上に近接して築かれるA3~A5の3基①、南斜面上に点在するA1、A6~A8、A11の一群②、第1グループでは最大の第3群に属するA14号墳とその周囲に築かれるA2、A9、A10、A15~19号墳のまとまり③をみることができる（第5図）。

A3~A5の3基は近接していることに加えて、規模もよく似ており、被葬者間のきわめて密接な関係を思わせる。南斜面上に点在する一群はいずれも周囲に密接する古墳はなく、比較的独立的にある。最も南にあるA1号墳は昭和46年に発掘調査され、石室の一部が



第2図 鳥矢ヶ崎古墳群全体測量図





第4図 鳥矢ヶ崎古墳群分布図

確認されている。A14号墳を中心に分布する一群は密集度が高く、被葬者間の関係を想起させる。中心にあるA14号墳は古墳群全体でも大型墳に属し、有力者の墓とみることができよう。A14号墳の南と東に密接するA12、13、15号墳はの小型墳、極小型墳であり、有力者のもとにあった人々が葬られている可能性が高い。また、A2号墳とA10号墳は境を接して築かれており、被葬者間の密接な関係を思わせる。A2号墳は昭和46年に発掘調査され、木棺が発見されるとともに銚帯金具が出土している。

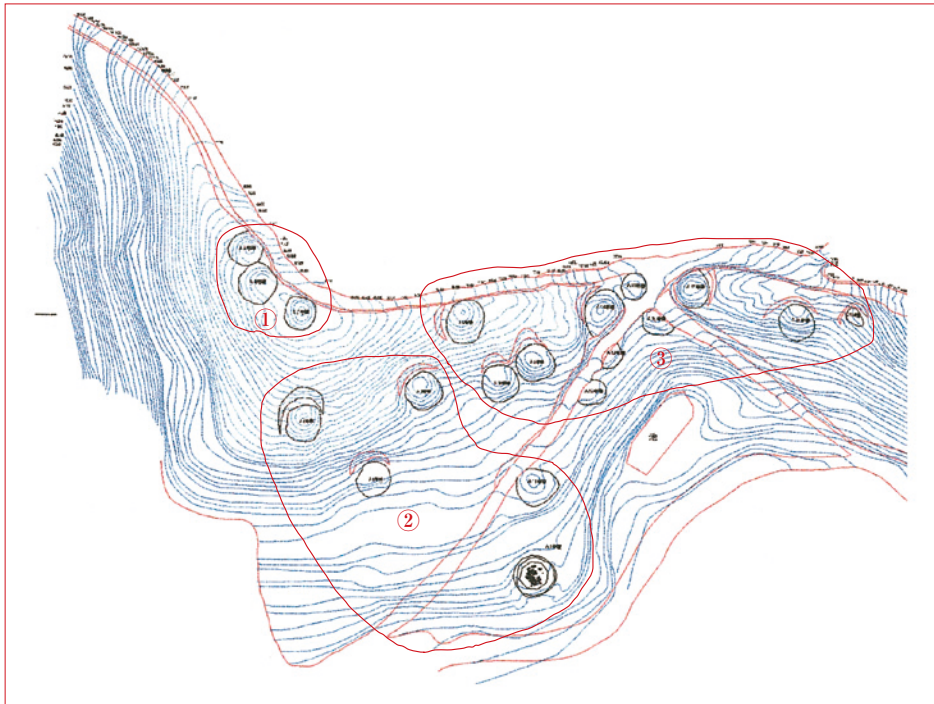
(2) 第2グループ

第2グループはA21、22号墳、B1～13号墳、B16号墳の合計16基で構成される。古墳群が分布する範囲で中央に位置する尾根の高まりを中心に最高所から東に傾斜する尾根線上に分布する。尾根の高まりの標高は85m前後で、第2グループは古墳群中で最高所を中心としており、すべて尾根線上に分布する点に特徴がある、16基中大型墳は4基、中型墳4基、小型墳、極小墳が8基である。中型墳が6割を超える第1グループに比べて、大型墳(第1群)が多く、中型墳が少なく、小型墳、極小墳が大幅に多い点に特色がある。有力者と従う人々が中心的に埋葬されている様子をうかがうことができる。大型墳が3基集中する古墳群中最高所の尾根の高まりが本古墳群の中心と考えられる。

尾根頂上付近の古墳はA22号墳、B1号墳、B2号墳である。これらはいずれも直径7mを越える大型墳で、墳丘高も高い。古墳群中で最高所に占地している点からもこの3基こそが鳥矢ヶ崎古墳群を営んだ勢力をひきいた人々の墓である可能性は高いと思われる。A22号墳とB1号墳の間に尾根の最高所があり、この部分には古墳は築造せず、B1号墳と2号墳の間に平地が残されている。いずれも古墳を築くには十分な広さがあり、他の部分の密集度からして、当然古墳が築かれる場所に見える。この二つのスペースはそれぞれの古墳を際立たせるための空間であったのか、古墳が築造される予定で残されていたのか



写真4 第1グループ航空写真(工藤健氏提供)



第5図 第1グループ古墳分布図



写真5 A3～5号墳



写真6 A1号墳現状



写真7 A7号墳(中央)、A9号墳(奥)



写真8 A14号墳



写真9 A15（中央）、16（右奥）、17（左奥）号墳

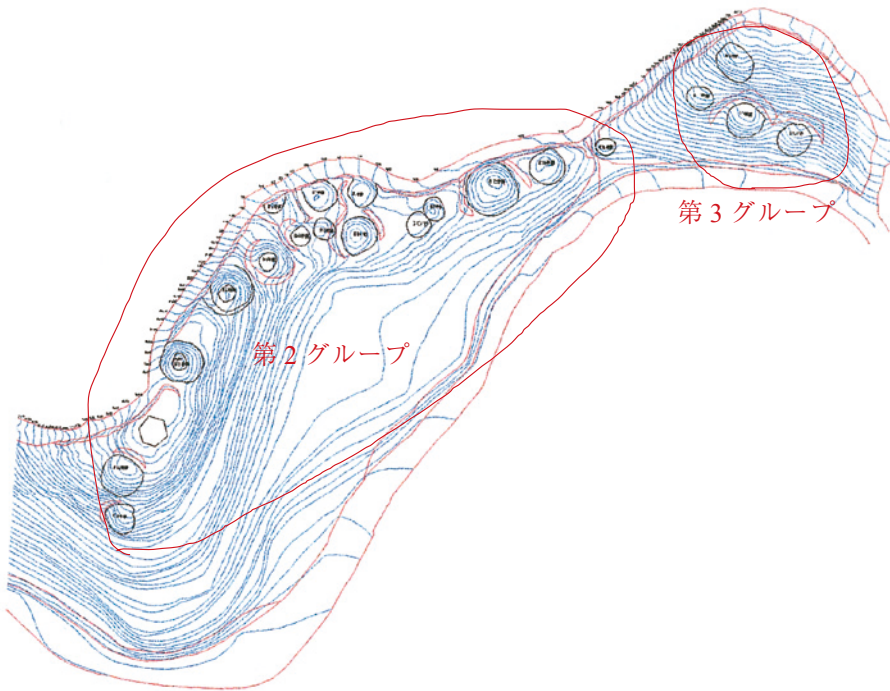
判断が難しい。

最高所から東に降る斜面には、中型墳3基と小型、極小墳4基、合計が7基が密集する。各古墳の周溝が斬り合うなど狭い空間に最大数の古墳を築いたかのようである。小型、極小墳が優越するこれらの古墳は最高所の古墳に葬られた有力者に対して従属的な人々の墓であった可能性が考えられる。

第1グループに東端、中央の尾根高所と東尾根高所との間の低地、標高72m付近には古墳群中最大の大型墳B12号墳を中心に中型墳1基、小型、極小墳3基、合計5基が分布する。有力者とその支配下との関係を読み取ることも可能だろう。

(3) 第3グループ

第3グループは古墳群東端にあたる標高81m付近の高まり西側斜面、南側斜面に分布する。中型墳3基、極小墳1基、合計4基で構成される。比較的均質な一群である。



第6図 第2、第3グループ古墳分布図



写真10 A22号墳



写真 11 第 2、3 グループ航空写真（工藤健氏提供）



写真 12 B1、2 号墳



写真13 B2～6号墳



写真14 第2グループ東側航空写真



写真 15 第 3 グループ B17、14、15 号墳

第4章 鳥矢ヶ崎古墳 A1・A2号墳出土遺物について

1. はじめに

昭和46年3月に発掘調査が実施された鳥矢ヶ崎古墳群 A1号墳、A2号墳出土遺物について改めて資料化を行ったので報告する。

資料化を行った遺物は報告書(栗駒町教育委員会 1972、以下報告書は本書を指す)に掲載された A1号墳出土の土師器鉢1点、須恵器甕1点、A2号墳出土の銚帯金具(絞具1点、巡方6点、丸軋12点)、蕨手刀1点、須恵器高台付坏1点、土師器壺1点であるが、このうち A1号墳出土の土師器坏、A2号墳出土の刀子は所在不明となっており、観察及び資料化はできなかった(註1)。

2. 鳥矢ヶ崎古墳 A1・A2号墳の概要と出土遺物

各古墳の概要と遺物の出土状況について報告書の記載を参考に概観したうえで、出土遺物の概要を報告する。

(1) 鳥矢ヶ崎古墳 A1号墳

【古墳】

古墳群が分布する西側丘陵下部の緩斜面に所在する直径6.3m、高さ0.6mの円墳。盗掘を受けており、墳丘上には河原石が散乱していた。墳丘周囲には東、西、北にかけて幅1mほどの浅い周溝がめぐるが、南側は不明瞭である。堆積土には白色粘土がみられる。

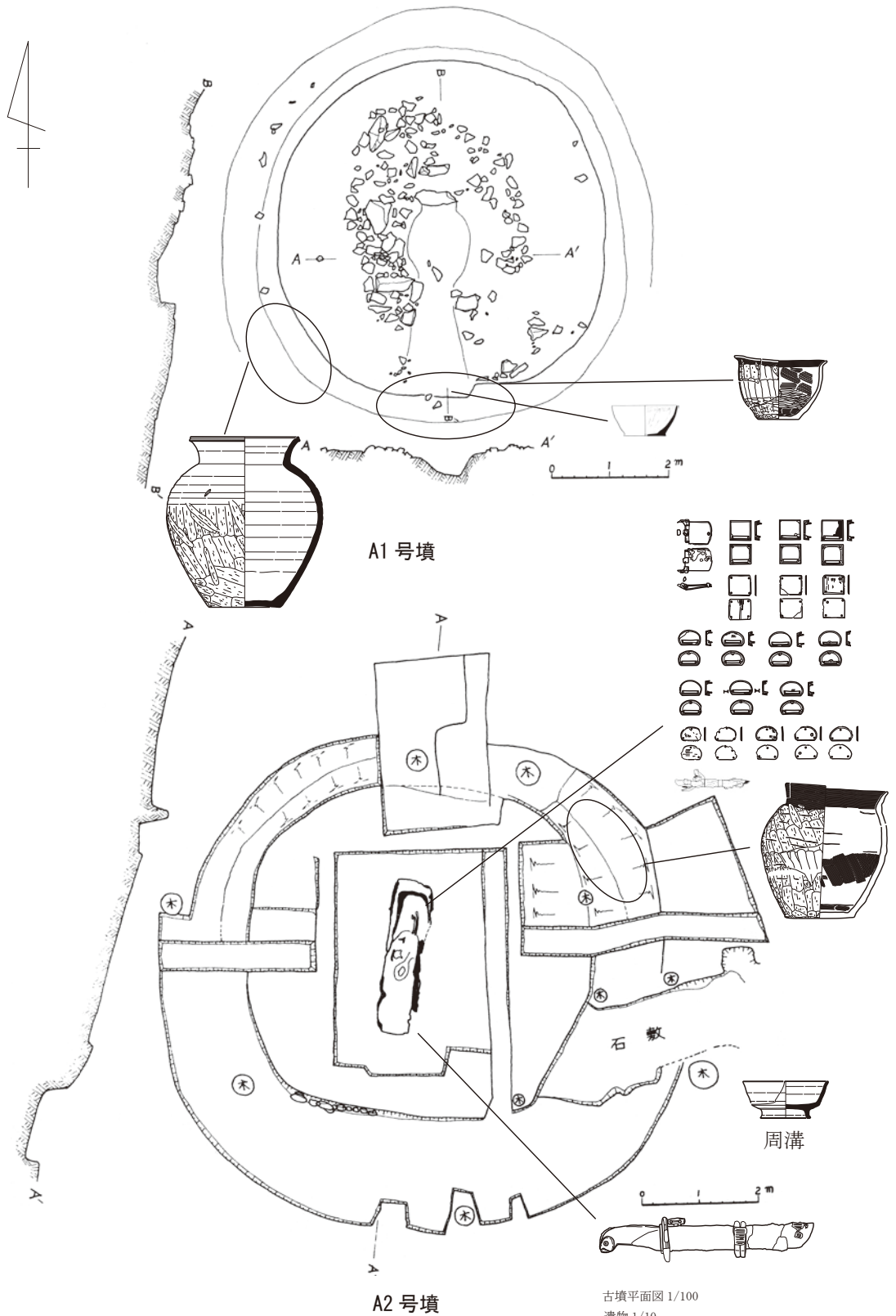
主体部は南側に開口する退化した横穴式石室であり、石積みの範囲は南北3.5m、東西2.8mである。北側に長さ0.7m、幅0.3mの凝灰岩割石をおき、その左右には大小の河原石を並べる。玄門にあたる部分は左右に細目の大石を置き区切りとする。西壁では石積み2段分、高さ約0.2m確認された。残存する河原石から想定される高さは石積み3~5段分、0.3~0.5mほどと考えられている。石室内では地山を0.4mほど掘り下げた土坑が確認された。堆積土は砂利を含む黒土であり、墳丘南裾にまでつづき、扇形に広がる。

【遺物の出土状況】

遺物は羨道前面周溝より土師器坏、土師器鉢、須恵器甕、須恵器小破片が出土している(第6図)。須恵器甕は南側前庭部との記載もある(註2)。このほか A1号墳では明治末年ころに盗掘を受けた際に馬具が出土したという(註3)。

【出土遺物】

第2図1は須恵器甕である。口縁部の約1/2が欠損する。ほぼ平坦な底部からやや急に立ち上がり、体部上半に最大径を持つ。外面はロクロナデ調整されており、体部中央から下半にかけて縦方向のヘラケズリが施される。体部上半のロクロナデはカキ目風となる。また、この部分にはヘラ記号か意図した刻書かは判断しづらいが、工具による棒状の刻書がある。内面の下半(図中の破線部分より下側)では器面が斑状に剥離しており、煮炊き



第6図 鳥矢ヶ崎古墳 A1 号墳・A2 号墳と遺物出土状況

古墳平面図 1/100

遺物 1/10

古墳平面図と遺物実測図の一部は栗駒町教育委員会 1972 より引用一部改変

などに用いられた使用痕跡とみられる。第7図2は土師器鉢である。製作にロクロを用いない小型のものである。平坦な底部からやや急に立ち上がり、体部下半ではほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は外半する器形である。調整は外面では口縁部横ナデ、体部縦方向のヘラケズリ、体部下半は幅の広いヘラミガキとなる。底部はヘラケズリが施される。内面は口縁部横ナデ、体部上半にハケメ、下半に幅の広いヘラミガキ、内面見込から体部の立ち上がり付近にかけてナデ調整がみられる。内面には一部黒色の範囲がみられるので、黒色処理を意図した可能性もある。第8図3は所在不明の土師器坏である。報告書によれば、製作にロクロを用いない平底のもので、内面はヘラミガキ・黒色処理される。

(2) 鳥矢ヶ崎古墳 A2 号墳

【古墳】 古墳群が分布する西側丘陵斜面に所在する直径7.0m、高さ1.1mの円墳。墳丘は地山上に木炭を含む灰褐色粘土質土、その上部に赤褐色土を積み構築される。墳丘の周囲に幅2mの周溝がある。周溝堆積土は黒色土であり、この堆積土下には厚さ0.1mの白色粘土がみられる。

主体部は墳頂下0.4m、墳丘のほぼ中心において長軸が南北方向である組み合わせ式木棺が確認された。棺床や棺座はみられない。木棺は長さ2.8m、幅0.7m。棺は木質の残存状況がきわめてよく、底板、側板、木口板が確認される。

【遺物の出土状況】

遺物は木棺内、封土内、周溝内から出土している（第6図、註4）。

木棺内からは鉄製品（土化したもので馬具の一部などとされる）、人骨1体分（肋骨、腰骨、大腿骨の一部など）が出土しているが取り上げられていない。棺北東隅付近、推定される頭部の東側から鈿帯金具（絞具1点、巡方6点、丸鞆12点）、刀子1点がまとまって出土した。

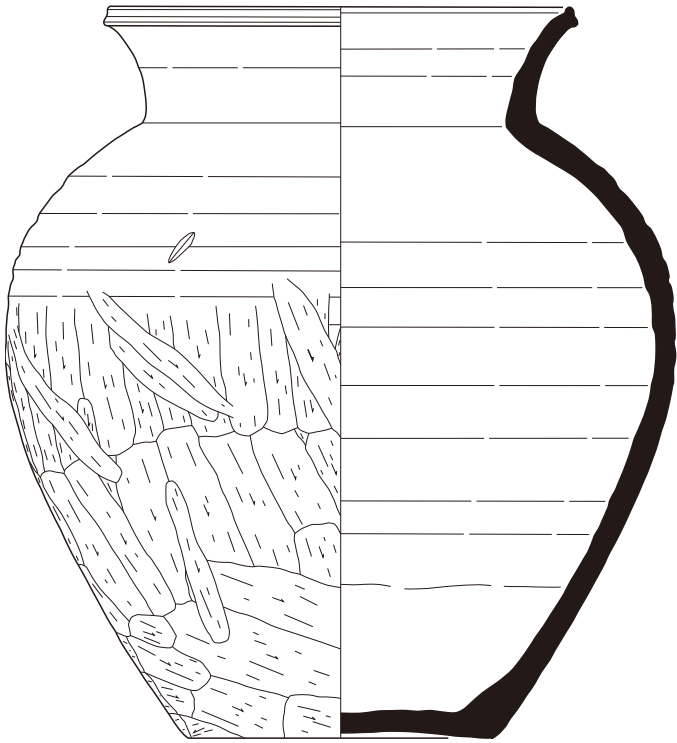
木棺の南東隅、棺外封土内からは蕨手刀1点が出土した。

周溝内より須恵器坏、須恵器高台付坏、周溝北東部から土師器壺が出土している。

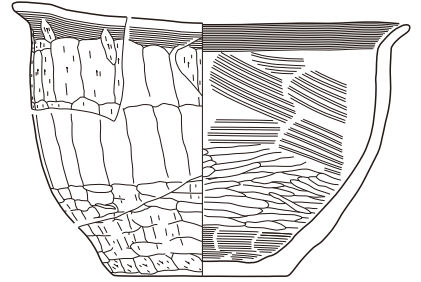
【出土遺物】

第9図1は須恵器高台付坏である。台形状の器形で体部下半に稜をもつ稜碗に類似するものである。口縁部はやや外反する。やや長い高台部は底面外側よりやや内側にとりつけられており、外側に踏ん張る形態である。外面内面ともにロクロナデ調整であり、底部切離しは回転ヘラ切りによるものである。第9図2は土師器壺である。口縁部の約3/4を欠損する。製作にロクロを用いないもので、上半部は大きく歪む。このことから、どのような器形を意図して製作されたのか、やや判断に苦しむが、平底で、体部中央付近に最大径を持ち、口縁部がほぼ直立する器形であるとみられる。調整は外面では口縁部横ナデ、体部縦方向のヘラケズリ、底面ヘラケズリ、内面はナデ調整である。外面及び内面には粘土紐を積み上げて製作していった際の痕跡が特徴的にみられる。

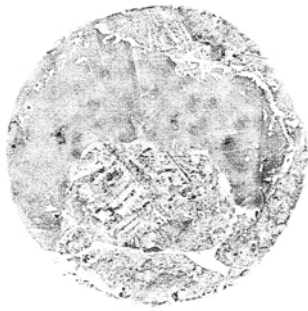
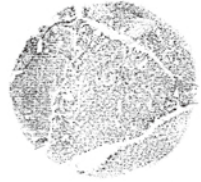
第10図3～21は鈿帯金具である。3は絞具、4～6は巡方の表金具、7～9は巡方の裏金具、



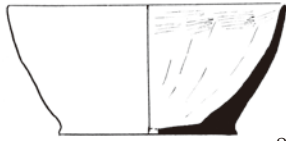
1



2



第7図 鳥矢ヶ崎古墳群 A1 号墳出土遺物 (1)

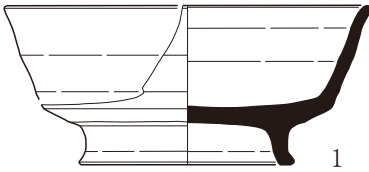


報告書より転載

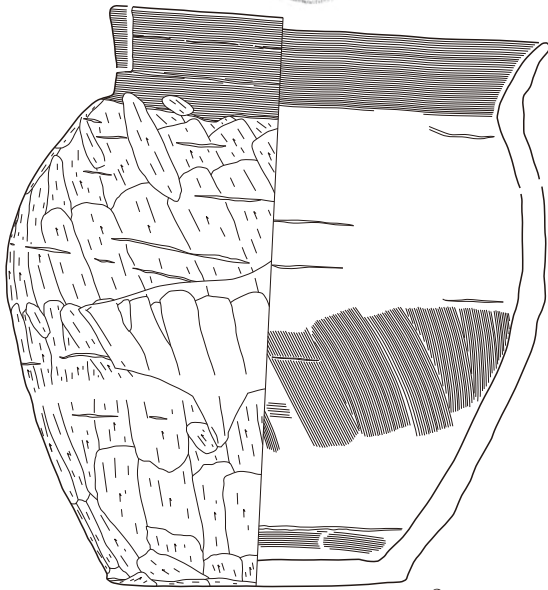
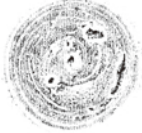
3

番号	層位	種別	器種	特徴
1	羨道前面周溝	須恵器	甕	残存：3/5。器高：29.0 cm。口径：18.2 cm。底径：12.2 cm。外面：ロクロナデ。体部上方のロクロナデによる凸部分はカキ目風となる。棒状のヘラ記号ないしは工具痕。体部下半はロクロナデの後ヘラケズリ。暗灰色 (N3/0) ~ 灰色 (N6/0)。底部：ヘラケズリ。内面：ロクロナデ。体部下半より見込みにかけて使用によるとみられる斑状の剥離痕がある。暗灰色 (N3/0) ~ 灰色 (N6/0)。ネーミングなし。
2	羨道前面周溝	土師器	鉢	残存：3/5。器高：10.0~10.8 cm。口径：15.5 cm。底径：7.0~7.4 cm。外面：横ナデ。ヘラケズリ。体部下半はヘラケズリの後幅の広いヘラミガキ。にぶい褐色 (7.5YR5/4)。底部：ヘラミガキ。内面：横ナデ。ハケメ。幅の広いヘラミガキ。内面見込み付近はナデ。黒色処理か。黒色 (7.5YR2/1) ~ 黒褐色 (7.5YR3/1)。ネーミングは「A号7T s46.3.20」。
3	羨道前面周溝	土師器	坏	所在不明。器高：5 cm。口径：約11 cm。底径：約7 cm。外面：不明。明褐色。底部：不明。内面：ヘラミガキ・黒色処理。

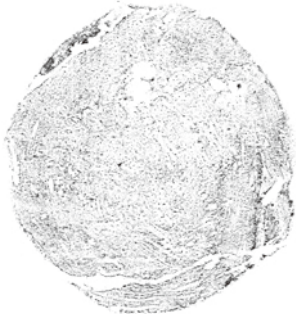
第8図 鳥矢ヶ崎古墳群 A1号墳出土遺物(2)



1



2



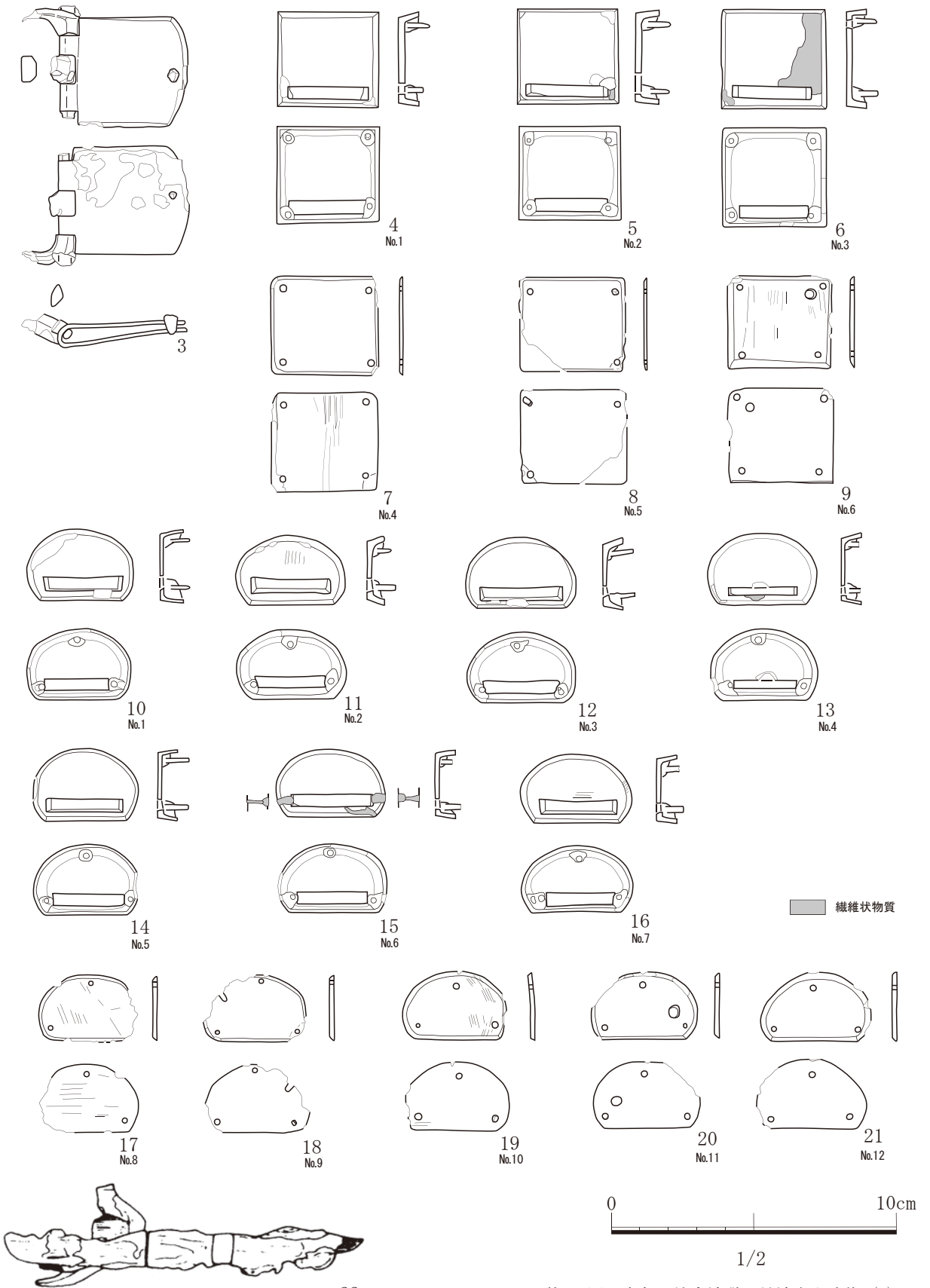
番号	層位	種別	器種	特徴
1	周溝	須恵器	高台付坏	残存：3/5。器高：6.3 cm。口径：14.4 cm。底径：7.4 cm。外面：ロクロナデ。灰色 (5Y6/1)。底部：回転ヘラ切りの後ロクロナデ。内面：ロクロナデ、灰白色 (5Y7/1)。ネーミングは「2号1T S46.3.24」、「1号1□23 S46.3.22」。
2	周溝北東部	土師器	甕	残存：4/5。器高：21.5~23.0 cm。口径：17.2 cm。底径：11.8 cm。外面：横ナデ。ヘラケズリ。にぶい黄褐色 (10YR6/4) ~ にぶい褐色 (7.5YR6/3)、橙色 (2.5YR6/6)。底部：ヘラケズリ。内面：横ナデ、ヘラナデ。にぶい褐色 (7.5RY6/3)。ネーミングは「S46.3.24 ①カ」。

第9図 鳥矢ヶ崎古墳群 A2号墳出土遺物(1)

鳥矢ヶ崎古墳群測量調査報告

番号	層位	種別	器種	特徴
3	棺内	銅製品	絞具	残存：C字形外枠と刺金の大半を欠損。長さ：4.6 cm。幅：3.8 cm。高さ：0.8 cm。厚さ：0.1 cm。重さ：35.1 g。釘は1ヶ所。
4	棺内	銅製品	巡方 No. 1	表金具。残存：ほぼ完形。長さ：3.4 cm。幅：3.6 cm。高さ：0.8 cm。厚さ：0.2 cm。重さ：20.4 g。長方形の孔。長さ：2.8 cm。幅：0.4 cm。外側の表面は剥離が目立つ。内側の釘4つのうち2つは中ほどより欠損する。完形のもの長さ0.9 cmで金具より0.4 cm突出する。
5	棺内	銅製品	巡方 No. 2	表金具。残存：ほぼ完形。長さ：3.4 cm。幅：3.5 cm。高さ：0.8 cm。厚さ：0.2 cm。重さ：23.0 g。長方形の孔。長さ：2.8 cm。幅：0.4 cm。外側の長方形の孔の脇に繊維状物質残存。外面及び側面に黒色の範囲。内側の釘4つのうち3つは中ほどより欠損。完形のもの長さ1.0 cmで金具より0.4 cm突出する。
6	棺内	銅製品	巡方 No. 3	表金具。残存：ほぼ完形。長さ：3.4 cm。幅：3.7 cm。高さ：0.7 cm。厚さ：0.1～0.2 cm。重さ：18.1 g。長方形の孔。長さ：2.7 cm。幅：0.4 cm。外側の1/4程度の範囲に繊維状物質残存する。内側の釘4つのうち2つは中ほどより欠損する。完形のもの長さ0.9 cmで金具より0.4 cmほど突出する。
7	棺内	銅製品	巡方 No. 4	裏金具。残存：ほぼ完形。隅は丸みを持つ。長さ：3.4～3.5 cm。幅：3.7 cm。厚さ：0.1 cm。重さ：8.2 g。釘孔3つ残存し、1ヶ所に釘先端部が残存する。幅：0.2 cm。内側に擦痕ないしはガジリとみられる痕跡あり。また、縁辺部分では表面のあたり痕跡と見られる錆の範囲がある。
8	棺内	銅製品	巡方 No. 5	裏金具。残存：隅部の1ヶ所欠損。隅は丸みを持つ。長さ：3.3 cm。幅：3.7 cm。厚さ：0.1 cm。重さ：4.4 g。釘孔4つ。幅：0.2 cm。内側に擦痕ないしはガジリとみられる痕跡あり。また、縁辺部分では表面のあたり痕跡と見られる錆の範囲がある。
9	棺内	銅製品	巡方 No. 6	裏金具。残存：ほぼ完形。隅は丸みを持つ。長さ：3.3 cm。幅：3.7 cm。厚さ：0.15 cm。重さ：12.2 g。釘孔4つ。幅：0.2 cm。また中央隅よりに家径0.4 cmの孔1ヶ所あり。外側に細かい擦痕あり。外側と内側に黒色の範囲。内側の縁辺はやや高くなる。
10	棺内	銅製品	丸鞘 No. 1	表金具。残存：ほぼ完形。長さ：3.7 cm。幅：2.5 cm。高さ：0.8 cm。厚さ：0.1 cm。重さ：8.3 g。長方形の孔。長さ：2.8 cm。幅：0.5 cm。外側と内側に黒色の範囲がある。内側の釘3つ。長さ0.9 cmで金具より0.2 cm突出する。
11	棺内	銅製品	丸鞘 No. 2	表金具。残存：ほぼ完形。長さ：3.8 cm。幅：2.4 cm。高さ：0.6 cm。厚さ：0.1～0.2 cm。重さ：13.5 g。長方形の孔。長さ：2.8 cm。幅：0.5 cm。外面に擦痕。外側の平坦と内側の全面が黒色の範囲。内側の釘3つのうち2つは中ほどより欠損。完形のもの長さ0.8 cmで金具より0.4 cm突出する。
12	棺内	銅製品	丸鞘 No. 3	表金具。残存：ほぼ完形。長さ：3.9 cm。幅：2.5 cm。高さ：0.7 cm。厚さ：0.1～0.2 cm。重さ：14.4 g。長方形の孔。長さ：2.9 cm。幅：0.4 cm。外側の一部と内側に黒色の範囲がある。内側の釘3つ。長さ0.9 cmで金具より0.4 cmほど突出する。
13	棺内	銅製品	丸鞘 No. 4	表金具。残存：ほぼ完形。長さ：3.9 cm。幅：2.5 cm。高さ：0.7 cm。厚さ：0.1 cm。重さ：12.4 g。長方形の孔。長さ：2.4 cm。幅：0.3 cm。外面に擦痕。外側の平坦の一部に繊維物質残存。外側の平坦面と内側に黒色の範囲がある。内側の釘3つは中ほどより欠損。長さ0.5 cm以上。
14	棺内	銅製品	丸鞘 No. 5	表金具。残存：ほぼ完形。長さ：3.7 cmカ。幅：2.5 cm。高さ：0.7 cm。厚さ：0.1～0.2 cm。重さ：13.8 g。長方形の孔。長さ：2.7 cm。幅：0.5 cm。外面に擦痕。側面と内側の全面が黒色の範囲。内側の釘3つ。長さ0.9 cmで金具より0.4 cm突出する。
15	棺内	銅製品	丸鞘 No. 6	表金具。残存：ほぼ完形。長さ：3.8 cm。幅：2.4 cm。高さ：0.7 cm。厚さ：0.1～0.2 cm。重さ：9.5 g。長方形の孔。長さ：2.7 cm。幅：0.5 cm。外面の長方形孔の両端から側面部分にかけて幅0.1 cmほどの紐状の繊維物質残存。また、長方形孔の下部に繊維物質残存。外側の平坦面の一部と側面が黒色の範囲。内側の釘3つは中ほどより欠損。長さ0.7 cm以上。
16	棺内	銅製品	丸鞘 No. 7	表金具。残存：ほぼ完形。長さ：3.9 cm。幅：2.4 cm。高さ：0.7 cm。厚さ：0.1 cm。重さ：12.8 g。長方形の孔。長さ：2.7 cm。幅：0.5 cm。外側の平坦面の一部と側面に黒色の範囲がある。内側の釘3つは中ほどより欠損。長さ0.7 cm以上。内側左隅部分に変更する前と変更後の釘の痕跡がある。
17	棺内	銅製品	丸鞘 No. 8	裏金具。残存：側面の一部欠損。長さ：3.5 cm以上。幅：2.4 cm。厚さ：0.1 cm。重さ：2.3 g。釘孔2つ残存。幅：0.1 cm。
18	棺内	銅製品	丸鞘 No. 9	裏金具。残存：側面の一部欠損。長さ：3.6 cm以上。幅：2.4 cm。厚さ：0.1 cm。重さ：3.1 g。釘孔3つ残存。幅：0.1 cm。外面の左上方縁辺側に長さ0.4 cm以上、幅0.2 cmの孔あり。
19	棺内	銅製品	丸鞘 No. 10	裏金具。残存：側面の一部欠損。長さ：3.6 cm。幅：2.4 cm。厚さ：0.1 cm。重さ：3.6 g。釘孔3つ残存。幅：0.1 cm。
20	棺内	銅製品	丸鞘 No. 11	裏金具。残存：側面の一部欠損。長さ：3.7 cm。幅：2.4 cm。厚さ：0.1 cm。重さ：3.5 g。釘孔3つ残存。幅：0.1 cm。外面の右中ほど縁辺側に径0.4 cmの孔あり。
21	棺内	銅製品	丸鞘 No. 12	裏金具。残存ほぼ完形。長さ：3.9 cm。幅：2.4 cm。厚さ：0.1 cm。重さ：6.1 g。釘孔3つ残存。幅：0.1 cm。
22	棺内	鉄製品	刀子	所在不明。長さ：12.7 cm。幅：0.7 cm。木質部がわずかに残存。
23	棺東側封土内	鉄製品	蕨手刀	ほぼ完形。長さ：36.4 cm。刃部長さ：24.8 cm。刃部幅：4.3 cm。棟幅：0.7 cm。柄部長さ：11.6 cm。柄部幅：3.3 cm。柄部厚さ：0.8 cm。鐔長さ：6.9 cm。鐔幅：4.8 cm。鐔厚さ：0.4 cm。足金具2ヶ所。鞘とみられる木質部が一部残存。

第2表 A2号墳金属製品観察表





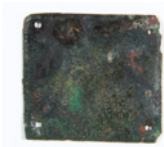
3



4
No.1

5
No.2

6
No.3



7
No.4

8
No.5

9
No.6

10
No.1

11
No.2



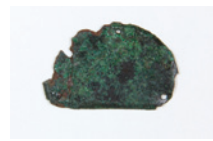
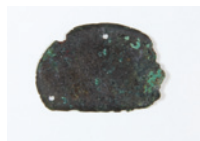
12
No.3

13
No.4

14
No.5

15
No.6

16
No.7



17
No.8

18
No.9

19
No.10

20
No.11

21
No.12

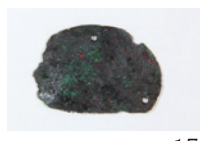
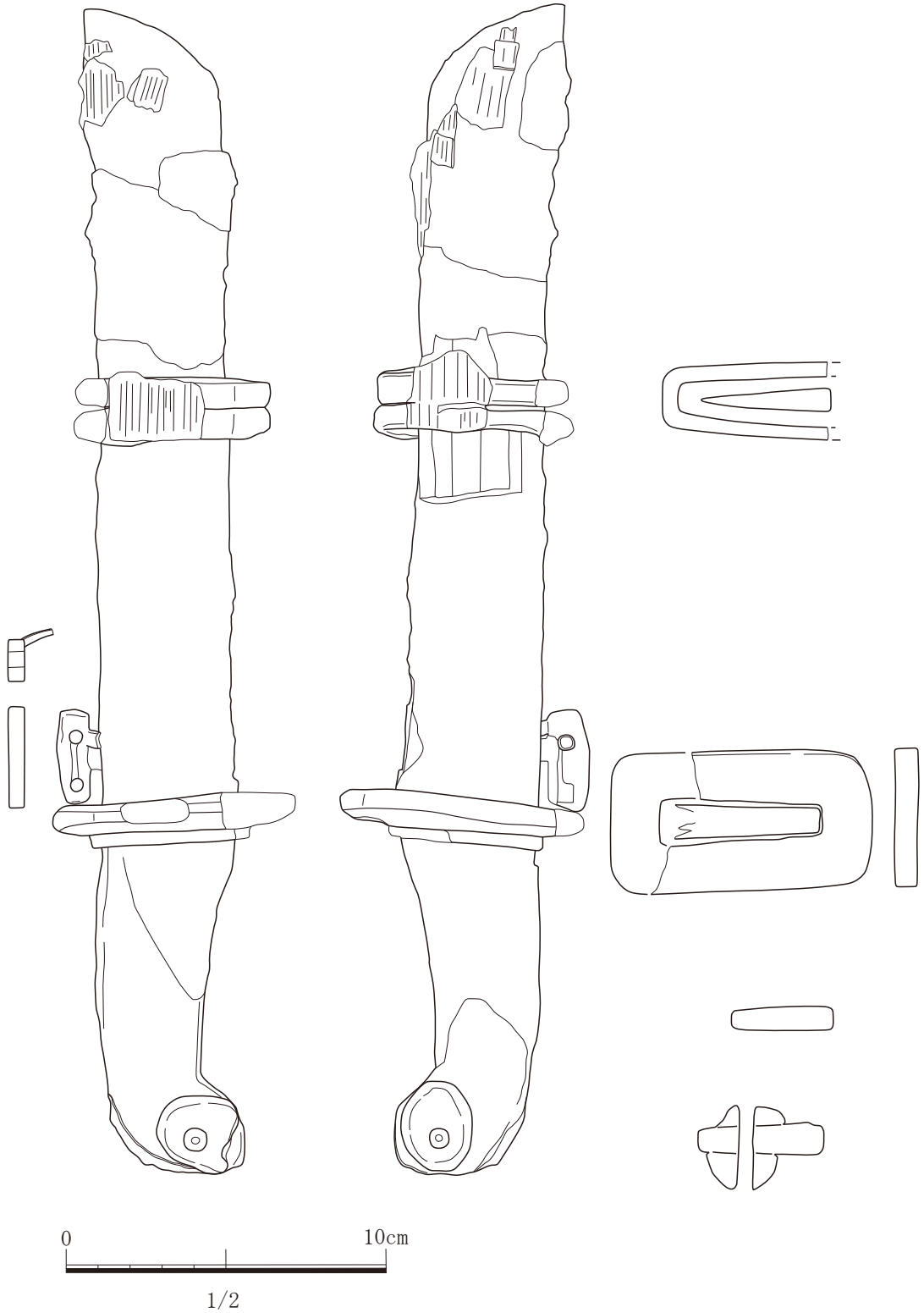


写真 16 鳥矢ヶ崎古墳群 A2 号墳出土遺物 (2)



第11図 鳥矢ヶ崎古墳群2号墳出土遺物(3)



写真 17 鳥矢ヶ崎古墳群 A2 号墳出土遺物 (3)

10～16は丸鞘の表金具、17～21は丸鞘の裏金具である。詳細は考察で触れる。

第10図22は鈎帯金具に接して出土したことから魚袋刀子とされるものである。現在所在不明である。報告書によれば長さ12.7cm、幅0.7cmで、木質部がわずかに残存する。

第11図23は蕨手刀である。詳細な時期は不明であるが、東北歴史資料館において保存処理及び復元が行われている。長さ36.4cmのもので、足金具付近に鞘とみられる木質部が残存している。詳細は考察で触れる。

3. 考察

ここでは報告を行った出土遺物から鳥矢ヶ崎古墳群の年代について考えてみたい。しかし、これまで発掘調査を行った古墳は2基であり、出土遺物の点数も少ないことから、詳細な年代は明確ではない。今回示す年代は古墳群のおおよその年代の一旦として捉えていただきたい。詳細な年代の把握や時間幅は今後の課題であると考えられる。

(1) 土器

A1号古墳から土師器2点、須恵器1点、A2号墳から土師器1点、須恵器1点が出土している。土師器は製作にロクロを用いないことや器形や調整などの特徴から東北地方南部の土器編年（氏家と典 1957）では「国分寺下層式」に該当するとみられる。また、比較する資料としては伊治城跡出土遺物が多くなる。伊治城跡の土器編年は古代栗原郡の古代集落、墳墓などを考えていくうえできわめて重要であるが、現在のところ確立されていないので、今回示す年代は現段階での見解と考えていただきたい。

ここでは分類は行わず、古代栗原郡域から出土した遺物をもとに年代を考える。

【A1号墳】

検討可能な遺物は所在不明の土師器坏を除く、土師器鉢、須恵器甕である。

土師器鉢と類似する器形のもの報告例は少ないが、伊治城跡SI454出土遺物（築館町教育委員会 1997）がある。しかし、全体的な器形は類似するが、SI454出土の土師器鉢は体部に丸みを持つこと、内面調整がヘラミガキ・黒色処理されるなど、相違点もみられる。SI454出土遺物は特徴から8世紀後半頃のものともみられる。

須恵器甕と類似するものとして伊治城跡SI04床面・細部出土遺物（宮城県多賀城跡調査研究所 1978）の須恵器甕（甕II類）や原田遺跡SI30出土（宮城県教育委員会 2008）の須恵器甕（Po61、第13図61）がある。伊治城跡SI04は製作にロクロを用いた土師器とともに出土していることから8世紀末から9世紀前葉頃のものともみられる。原田遺跡SI30は焼失住居であり多量の土器が出土している。須恵器甕は体部下半に丸みを持ちやや器形は異なるが、調整は類似する。8世紀後半頃のものともされている。

点数が少なく、年代を検討することに苦慮するが、以上の類例からA1号墳の年代はおおよそ8世紀後半代ともみられる。

【A2 号墳】

検討資料は須恵器高台付坏、土師器壺である。

須恵器高台付坏は伊治城跡では多数出土している。編年の定点となる、年代が明確な資料としては壺 G の出土から宝亀 11 年（780）伊治公麻呂の乱以降の土器群とされる SI173 出土遺物（築館町教育委員会 1991）があり、8 世紀末から 9 世紀初頭と考えられている。また、出土遺物の特徴が SI173 とは異なり、780 年以前に位置づけられると考えられる資料としては伊治城跡 SI725（栗原市教育委員会 2009）があげられる。

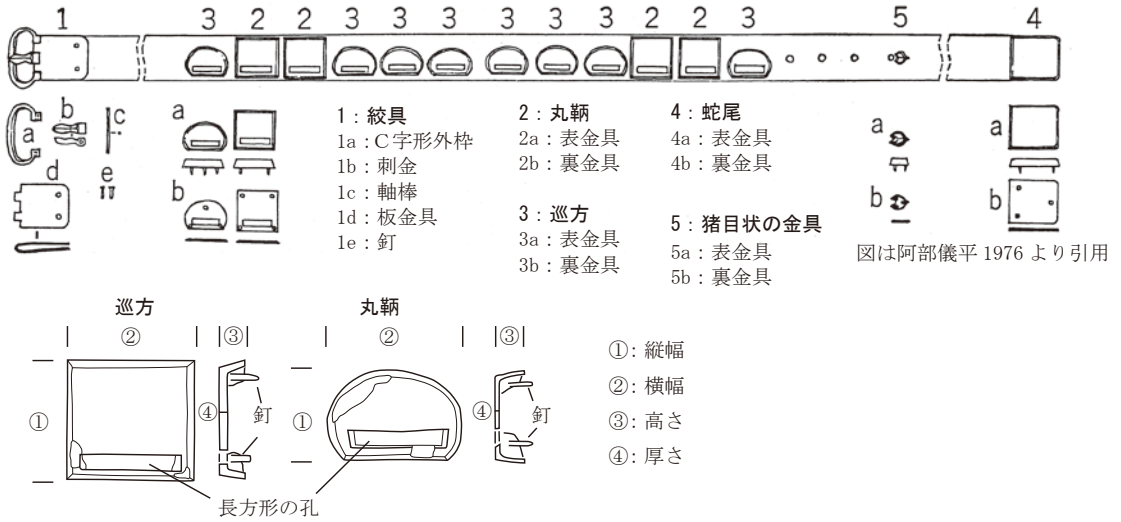
伊治城跡 SI173 出土の須恵器高台付坏は器高が高く深いものと低いものがあり、口縁端部がやや外反するものが多い。伊治城跡 SI725 出土遺物は A2 号墳出土の須恵器高台付坏と大きさは類似するが、口縁端部が直立することや高台部が底部外側にとりつくなど器形が異なっている。これらの類例と比較すると A2 号墳出土の須恵器高台付坏は伊治城跡 SI173 出土遺物により類似性が認められる。

土師器壺は球胴型の甕の器高を高くした胴張型ともいえる器形のものである。類似する資料は伊治城跡や周辺の発掘調査で出土することはあまりなかった。また、宮城県内でも出土しない器形である。しかし、伊治城跡周辺では近年の発掘調査などにより少数ながら類似する資料が確認された。城下遺跡 SI85 出土の土師器甕（栗原市教育委員会 2014）は体部上半の最終調整にハケメが施されることや器壁が薄い、頸部の段の有無や底部の形態などの点で違いはみられるが、体部上半に最大径をもち、口縁部が直立して立ち上がる器形は類似するものとみられる。城下遺跡 SI85 出土遺物は 8 世紀末から 9 世紀初頭頃の年代が考えられている。さらに、城下遺跡 SI85 出土遺物には口縁部の形態が東北地方北部の土師器甕に類似する小型の甕が含まれている。A2 号墳の土師器壺と類似する器形のもので、東北地方北部に系譜をもつ可能性もあるが、現在までのところ岩手県内で出土する土師器で類似するものは確認できていない。栗原市内ではこのほか伊治城跡 SI12 出土の土師器甕（宮城県多賀城跡調査研究所 1979）がある。口縁部が内傾する形態でやや異なるが、類似するとみられる。また、未報告資料ではあるが志波姫地区八樟出土遺物に類似する資料が含まれる。資料の点数はあまり多くないが、この器形のもので古代栗原郡の在地の土師器の 1 つになる可能性がある。なお、A2 号墳出土の土師器壺は粘土紐痕が残るなど製作が雑で器厚が厚いなど、上記の類例より粗雑で在地的な土師器であるとみられる。

点数が少なく、年代を検討することに苦慮するが、以上の類例から A2 号墳の年代は 8 世紀後半代のものでみられ、そのなかでもより新しい段階に位置づけられる可能性がある。

(2) 鈿帯金具

A2 号墳の棺内より銅製の絞具 1 点、巡方 6 点（表金具 3 点、裏金具 3 点）、丸軛 12 点（表金具 7 点、裏金具 5 点）がまとまって出土している。蛇尾は出土していない。出土状況の詳細は報告書掲載写真でのみ知ることができるが、どのような配列であったのかを知るこ



第12図 今回用いる銜帯金具の部位の名称と計測箇所

とはできない。なお、今回付した番号は任意のものであり、配列を示すものではない。また、報告書掲載図との対応関係も一部を除き明確ではない。銜帯金具の名称及び計測箇所については第12図に示した。

次にそれぞれの詳細について検討する。

絞具は1点ある。C字形外枠と刺金の大半は欠損する。C字形外枠は断面五角形、刺金は断面菱形である。軸棒は断面楕円形で幅は0.4cmである。先端部が若干欠損しているとみられる。板金具は幅3.8cm、長さ10cm程度の銅板を折り曲げて、釘1ヶ所とどめている。

巡方は6点ある。内訳は表金具3点、裏金具3点である。表金具はいずれもほぼ完形で、縦幅3.5~3.6cm、横幅3.4cmである。下方には長さ2.8cm、幅0.4cmの長方形の孔があり、形態は類似する。内面には裏金具をとめる釘が四隅にある。釘は完形のもの、長さが1cmとみられ、巡方の高さより0.4cmほど突出する。なお、釘の周囲は盛り上がり、本体と釘が同時に鋳造されたというよりは表金具と裏金具を組み合わせるに際し、釘の位置を調整しながら溶接されたと考えた方がよいとみられる。裏金具は1点が隅部を欠く以外、ほぼ完形である。縦幅3.7cm、横幅3.3~3.5cm、で形態は類似する。四隅に釘がはいる孔がある。またNo.6では四隅の孔の1つに隣接し、0.4cmの孔が確認できる。

丸鞆は12点あり、内訳は表金具7点、裏金具5点である。表金具はいずれもほぼ完形で、縦幅2.4~2.5cm、横幅3.7~3.9cmである。下方には長さ2.7~2.9cm、幅0.4cmの長方形の孔があるが、1点のみ長さ2.4cmとやや小さいものがある。全体的な形態は類似するが巡方表金具より大きさの幅がある。内面には裏金具をとめる釘が3ヶ所にある。釘は完形のもの、長さが0.9cmとみられ、丸鞆の高さより0.2~0.3cmほど突出する。なお、釘

の周囲は盛り上がっており、釘本体が斜めのものや No. 7 では変更前の釘の根元が残存しているものがある。巡方と同様に本体と釘が同時に铸造されたというよりは表金具と裏金具を組み合わせるに際し、釘の位置を調整しながら溶接されたと考えた方がよいとみられ、丸軋でより具体的に検証できると考えられる。裏金具は一部破損しているものもあるがほぼ完形である。縦幅 2.8 cm、横幅 3.3～3.5 cm で形態は類似する。3ヶ所に釘がはいる孔がある。また No. 11 では孔の 1 つに隣接し、0.4 cm の孔が確認できる。No. 9 も一部破損しているが楕円形の孔がある。

報告書では金銅製と報告されているが、今回の整理では金銅製かどうかは確認できなかった。巡方及び丸軋の表金具及び裏金具の色調は緑青部分と黒色の部分がみられた。また、巡方の表金具 No. 2 及び No. 3 では繊維状の物質が残存している。丸軋表金具 No. 6 では長方形の孔の短辺より紐状の物質が付着していることがわかった。今後、これらの分析により銚帯金具の外装の状況が把握される可能性もある。

次に点数であるが、これまでは表金具の点数から絞具 1 点、巡方 3 点、丸軋 7 点と考えられてきたように思われる。そこで今回の資料化に合わせ、それぞれ表金具と裏金具の組み合わせが、最小の点数である巡方 3 点、丸軋 7 点となるかどうか検討してみた。検討はそれぞれ表金具の裏側に裏金具を置いてみて、大きさ、釘と孔の関係から組み合わせかどうかをみてみたものである。検討結果を第 3 表に示す。

この結果、巡方は表金具 No. 2 と裏金具 No. 4、表金具 No. 3 と裏金具 No. 5 が組み合わせることが確認された。また、表金具 No. 1 と裏金具 No. 6 は組み合わせ可能性はあるが確定的ではなかった。巡方は 3 点であった可能性が高いが、4 点であった可能性も残る結果となった。

一方、丸軋では巡方と異なり組み合わせないものが多く確認された。組み合わせるものとして

【巡方】

	No. 4	No. 5	No. 6
No. 1	×	×	△
No. 2	○	×	×
No. 3	×	○	×

【丸軋】

	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 12
No. 1	×	×	×	×	×
No. 2	×	×	×	×	×
No. 3	×	×	×	×	○
No. 4	×	×	×	○	×
No. 5	○	×	×	×	×
No. 6	×	×	○	×	×
No. 7	×	×	×	×	×

組み合わせの基準

① 大きさ ② 釘の位置

○ 表と裏が組み合わせ可能性が高いもの

△ 表と裏が組み合わせ可能性はあるが、確定的ではないもの

× 表と裏が組み合わせないもの

第 3 表 想定される銚帯金具の組み合わせ

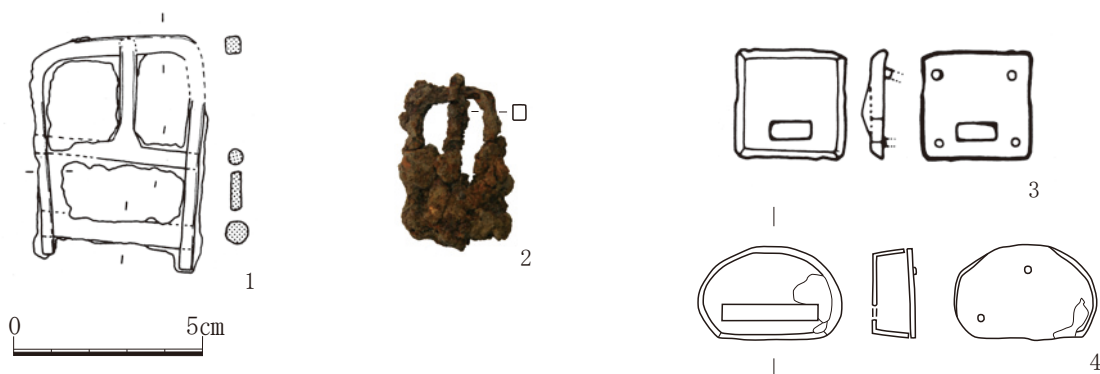
は表金具 No. 3 と裏金具 No. 12、表金具 No. 4 と裏金具 No. 11、表金具 No. 5 と裏金具 No. 8、表金具 No. 6 と裏金具 No. 10 が確認された。表金具 No. 1、No. 2、No. 7 と裏金具 No. 9 は組み合うものを確認できなかった。このことから丸鞆は表金具と裏金具が組み合うもの4点、組み合わないもの4点があり、現段階で想定される丸鞆の数は8点であることが判明した。

以上より A2 号墳出土の鍔帯金具は絞具 1、巡方 3 ないし 4、丸鞆 8 で構成されると考えられる。正倉院に伝世する資料では丸鞆 1 + 巡方 2 + 丸鞆 5~6 + 巡方 2 + 丸鞆 1 が多いと指摘されており（松村恵司 2002）、東北地方で巡方 4 点、丸鞆 8 点が出土している遺跡には岩手県西根古墳群縦街道支群例がある（八木光則 2002）。A2 号墳出土の鍔帯金具はこれらの数値にきわめて近い点数であったと考えられる。

鍔帯金具には規格性が存在していることはすでに指摘されている。阿部義平氏により① 帯の幅は絞具の幅と蛇尾の幅に一致し、② 巡方の縦幅は帯幅よりもわずかに小さいと指摘されている（阿部義平 1976）。さらに松村恵司氏により③ 巡方縦幅は丸鞆横幅と等しく、帯幅に一致すると指摘された（松村恵司 2002）。これらから A2 号墳出土の鍔帯金具を考えると、絞具の幅から帯幅は 3.8 cm となり、巡方表金具幅 3.5~3.6 cm から②について確認される。しかし、丸鞆表金具の長さは 3.7~3.9 cm となり、巡方表金具より 0.1~0.3 cm ほど大きく、さらに帯幅と同じかやや大きいものとなり、③の関係はわずかではあるが一致しない。丸鞆表金具幅の数値のばらつきは丸鞆鑄造の際の誤差の範囲であり、3.8 cm の大きさにそろえようとしていた場合は①の帯幅と一致することとなるが、鍔帯金具は 0.3 cm ごとに大きさが異なるとされており、A2 号墳出土の巡方と丸鞆の一部に 1 寸 2 分 (3.6 cm) の大きさのものと丸鞆に 1 寸 3 分 (3.9 cm) の大きさのものが存在していた可能性も考えられる。ここでは、若干の誤差は存在するが、A2 号墳出土の鍔帯金具は絞具の幅及び巡方の幅から 1 寸 2 分の規格を持つと考え、正七位の鍔帯になると想定する。

次に栗原市内の遺跡から出土した鍔帯金具についてみる。伊治城跡から SI04 堆積土 2 層より絞具 1 点（宮城県多賀城跡調査研究所 1978）、SI12 堆積土より巡方 1 点（宮城県多賀城跡調査研究所 1979）、個人住宅確認調査（097 地点）東区カクラン層より絞具 1 点（栗原市教育委員会 2009）、城下遺跡 SI16B 堆積土より丸鞆 1 点（栗原市教育委員会 2014）が出土している。詳細は第 13 図を参照していただきたい。

このうち A2 号墳出土の鍔帯金具と同様の大きさを持つものは城下遺跡 SI16B 堆積土出土の銅製の丸鞆である。SI16B は火災住居であり、土師器、須恵器などが多量にしており、製作にロクロを用いた土師器坏も供給されている。また、豊富な金属製品を保有しており、銅製品では丸鞆のほかに銅碗、鉄製品では刀装具、鉾、板状製品、刀子などが出土している。これらから伊治城と極めて近い関係にあったと考えられている。このことから A2 号墳の被葬者も伊治城及び律令国家と近い関係にあったと想定される。また、今後、同様の



番号	遺跡名	遺構	種別	特徴	文献
1	伊治城跡	SI04 2層	絞具	ほぼ完形。長さ：6.27 cm 以上。幅：4.5 cm。厚さ：1.2 cm。錆化激しいとあることから鉄製か。	宮多研 1978、46 頁、第 27 図 12
2	伊治城跡	O57 東区 カクラン層	絞具	ほぼ完形。長さ：4.0 cm。幅：3.2 cm。鉄製。	市 2009、42 頁、 第 29 図 44
3	伊治城跡	SI12 1層	巡方	ほぼ完形。長さ：2.9 cm。幅：2.9 cm。厚さ：0.3 cm。中央下半に方形の透かし孔。裏面四隅に鋌脚。鉄製。	宮多研 1979、17 頁、第 9 図 11
4	城下遺跡	SI16B 堆	丸鞆	ほぼ完形。表金具と裏金具が組み合った状態で出土。長さ：2.5 cm。幅：3.8 cm。高さ：1.1 cm。孔の長さ：2.5 cm。孔の幅：0.4 cm。裏面 2ヶ所に釘。銅製。	市 2014、34 頁、 図版 28 75

第 13 図 栗原市内出土の絞具・巡方・丸鞆

大きさの銜帯がまばらに出土するのであれば、古代栗原郡の有力な氏族が入手できる最大の銜帯である可能性も出てくる。

伊治城跡出土の絞具、巡方はいずれも鉄製である。絞具は T 字状の刺金を持つとみられるとともに幅は 4.0 cm、4.5 cm で、A2 号墳出土の絞具とは形態が異なる。また、巡方も幅 2.9 cm と小型である。伊治城跡出土の絞具、巡方の位置づけについては今後、馬具の可能性も含め、検討を行いたい。

A2 号墳出土の銜帯金具は栗原市内では唯一まとまりを持って出土したものであり、さら共伴した遺物から年代が限定できるため、資料的価値はきわめて高いと考えられる。また、繊維状物質の分析が進めばさらに新たなことが判明すると考えられる。

(3) 蕨手刀

X 線撮影を実施していないので現段階での理解となるが、全長 36.4 cm、刃部長 24.8 cm、柄部長 11.6 cm、刀身幅 4.3 cm、柄部幅 3.3 cm、棟幅 0.7 cm を計る。刃部の長さから横刀に分類される。

切先形状はカマス鋒である。柄頭の孔には鉄製の座金を据える。刃部は角棟肉無である。鐙は角切札形とみられ、刃部側 2/5 は復元されているとみられる。

鉄製とみられる足金具は一の足部分に双脚を欠く横鑲、二の足部分に横鑲を欠く双脚が残存する。これは報告書に掲載された実測図と同様の位置にあり、出土状況を示すものと

考えられる位置に修復されたと考えられる。一の足部分の横鑢は長方形で、中央付近に2孔がみられ、これをつなぐように沈線状にくぼむ。沈線状のくぼみが開口しているかどうかはX線写真により確認する必要がある。一方の孔の下部から双脚とみられる部品が伸びる。位置関係からもう片方の孔の下部からも伸びていたとみられる。二の足部分の双脚と比べると狭く薄い。残存状況から足金具は横鑢双脚と考えられる。横鑢双脚足金物は8世紀代のものと考えられる正倉院に伝わった太刀にみられ、これらは方形の横鑢であり、9世紀～10世紀のものでは横鑢は丸みをおびるとされている(津野仁 2011)。

方形の横鑢双脚足金具が用いられており、柄反のみで、刃反がないが、柄頭は強く屈曲する形態を持つことから8世紀後半代のものと考えられる。

(4) 小結

上記までの検討からA1・A2号墳の年代は次のようにまとめられる。

A1号墳からは土師器坏、土師器鉢、須恵器甕が出土している。8世紀後半代のものと考えられる。所在不明の土師器坏は内面黒色処理される平底のものなので矛盾はない。

A2号墳からは土師器壺、須恵器高台付坏、銚帯金具、蕨手刀が出土している。出土土器から8世紀後半代と考えられ、この中でもより新しい年代である可能性もある。

以上からA1・A2号墳は8世紀後半代のものとみられるが、いずれも9世紀初頭ころまで下る可能性はある。また、A1号墳とA2号墳の前後関係は出土土器からは明確には検討できない。

この年代は鳥矢ヶ崎古墳群が営まれた時期の一端を示すといえる。

4. まとめ

昭和46年に発掘調査が実施されたA1・A2号古墳出土遺物について改めて資料化し、観察を行い、検討を行った。その結果、A1・A2号古墳の年代は8世紀後半代のものと考えることができた。また、A2号墳は8世紀後半代でもより新しい時期のもの可能性もある。これは城柵官衙遺跡である伊治城跡が機能していた時期と並行するものである。出土遺物のうち律令国家とかかわりがあるとみられる銚帯金具や須恵器などが出土するとともに、土師器は極めて在地的なものであると考えられた。

今回の資料化により銚帯金具の残存状況が極めて良好であり、繊維状物質や紐状の物質などを確認することができた。今後はこれらの分析を実施する必要があると考えられる。

鳥矢ヶ崎古墳群造営の開始年代や終末年代、古墳の造営方法、葬送儀礼の検討、古墳造営集団の実態解明とこの集団の集落の解明、律令国家及び伊治城との関係などは今後の発掘調査に多くをゆだねることとなるが、鳥矢ヶ崎古墳群は古代栗原郡を考えていくうえできわめて重要な遺跡であることを再認識できた。

鳥矢ヶ崎古墳群出土遺物を検討するに際し、佐藤敏幸氏(東松島市教育委員会)、高橋千晶氏(奥州市教育委員会)、大場亜弥氏(栗原市教育委員会)、関根章義氏(仙台市教育

委員会)、廣谷和也氏(宮城県多賀城跡調査研究所)、大久保弥生氏(大崎市教育委員会)、佐藤佳奈氏(石巻市教育委員会)に種々ご教授いただきました。最後にこのような機会を与えていただいた辻秀人先生に感謝申し上げます。

(栗原市教育委員会 安達訓仁)

註

- 1 鳥矢ヶ崎古墳群出土遺物は現在栗原市教育委員会が所蔵しており、栗原市築館出土文化財管理センターに収蔵している。以前は栗駒公民館3階展示室において展示されていた栗駒公民館が解体されることから2007年3月22日に旧栗駒町所蔵の出土遺物を栗原市築館出土文化財管理センターに移管している。なお、栗原市教育委員会で保管する鳥矢ヶ崎古墳群に関する資料は出土遺物のみで、図書類、写真類は引き継がれていない。

前述のように報告書掲載遺物のうち1号墳出土の土師器坏、2号墳出土の刀子は所在不明となっている。栗原市合併直後に撮影した写真でも土師器坏と刀子を確認することはできない。このほか報告書では土師器や須恵器の破片が出土していることを示していることができる。保管資料の中には鳥矢ヶ崎古墳出土遺物のラベルが入る箱に土師器数点が含まれるが、昭和46年調査のネーミング及び日付と異なることから、鳥矢ヶ崎古墳群出土遺物ではないとみられる。

昭和46年4月30日付で東北学院大学加藤孝氏より栗駒町教育委員会教育長宛に提出された埋蔵物発見届提出用の文書「栗原郡栗駒町鳥矢ヶ崎猿飛来古墳出土遺物」には以下のように記載されている。

第一号墳

土師器	浅鉢	一個体分
内黒土師器	坏	二個体分
須恵器	坏	一個体分
須恵器	壺	二個体分
須恵器	長頸壺	二個体分

第二号墳

土師器	壺	一個体分
須恵器	坏	三個体分
金銅製品	金銅製鈔帯全具	一個体分(十九片)
鉄製品	褰手刀子	一個体分
鉄製品	蕨手太刀	一個体分
木製品	組合式木棺	一個体分
その他	土質化鉄製馬具鐙	一組
	土質化人骨取り上げ不能	一鉢分

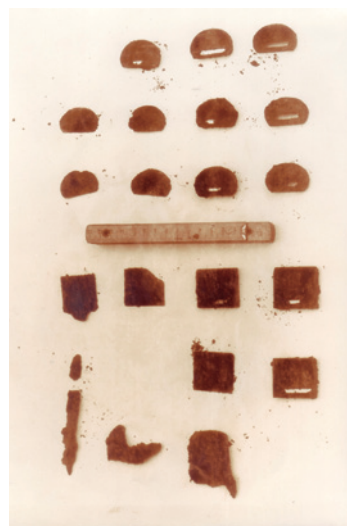


写真18 発見時の鈔帯金具

この後昭和46年6月14日付で埋蔵物発見届が提出されるが、出土遺物の記載は上記のとおりであり、報告書に掲載された遺物実測図のほか鈔帯金具、刀子の写真が添付されている(写真18)。

以上、報告書掲載遺物のほか、土師器、須恵器の破片が出土していることがわかるが、所在は不明である。点数はあまり多くないとみられる。なお、「一号墳出土須恵器坏」はA2号墳出

土須恵器高台付坏に接合している。

- 2 東北学院大学考古学研究部 1972 では遺物の出土状況がより具体的である。須恵器甕は墳丘南西裾の周溝、土師器鉢は古墳南側の墳丘裾部、土師器坏は石室羨道部南端とある。
- 3 この馬具は古墳に近接する神社が保管していたが、帝室博物館に寄贈されたという。また、昭和 45 年 11 月 22 日東北大学高橋富雄教授ほかがこの神社の宝物を調査した際の写真には蕨手刀 4 点（最大 3 振、最小 2 振）がある（写真 19）。出土地点の詳細は現段階では不明だが、明治末年ころに盗掘を受けた鳥矢ヶ崎古墳 A1 号墳から出土した可能性も考えられる。なお、東北学院大学考古学研究部 1972 では馬具とともに蕨手太刀・刀子が出土したとしている。今後、遺物の所在を確認したいと考えている。
- 4 須恵器高台付坏の出土位置は東北学院大学考古学研究部 1972 では棺外封土中出土とされる。

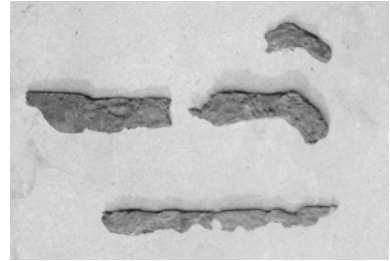


写真 19 蕨手刀

引用参考文献

- 氏家和典 1957 「東北地方土師器の形式分類とその編年」『歴史』 第 14 輯 東北史学会
- 東北学院大学考古学研究部 1972 「鳥矢ヶ崎古墳群発掘調査概勝」『温故』 第 7 号
- 栗駒町教育委員会 1972 『昭和 46 年度栗駒町埋蔵文化財報告 宮城県栗原郡鳥矢ヶ崎古墳調査概報』
- 阿部義平 1976 「銚帯と官位制について」『東北考古学の諸問題』 pp. 323～344
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1978 『伊治城跡 I—昭和 52 年度発掘調査報告—』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 3 冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1979 『伊治城跡 II—昭和 53 年度発掘調査報告—』 多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第 4 冊
- 築館町教育委員会 1991 『伊治城跡』 築館町文化財調査報告書第 4 集
- 辻 秀人 1996 「蝦夷と呼ばれた社会」『古代王権と交流 1 古代蝦夷の世界と交流』 pp. 215～248
- 八木光則 1996 「蕨手刀の変遷と性格」『考古学の諸相』 坂詰秀一先生還暦記念会 pp. 375～396
- 藤沢 敦 2000 「栗原・登米・本吉地方の古墳墓」『阿部正光君追悼集』 pp. 69～80
- 奈良文化財研究所 2002 『銚帯をめぐる諸問題』
- 松村恵司 2002 「銚帯金具の位階表示機能」『銚帯をめぐる諸問題』 pp. 3754
- 八木光則 2002 「北海道・東北地方の銚帯」『銚帯をめぐる諸問題』 pp. 182～192
- 盛岡市文化財研究会 2003 『蕨手刀集成（第 3 版）』 文化財資料集第 3 集
- 宮城県教育委員会 2008 『原田遺跡・下萩遺跡—一般国道 4 号築館バイパス関連遺跡調査報告書 I—』 宮城県文化財調査報告書第 219 集
- 栗原市教育委員会 2009 『伊治城跡—平成 20 年度：第 36 次発掘調査報告書—』 栗原市文化財調査報告書第 9 集
- 津野 仁 2011 『日本古代の武器・武具と軍事』 吉川弘文館
- 岩手県考古学会 2014 『北三陸の蝦夷・蕨手刀』 岩手県考古学会第 46 回大会（野田村大会）
- 栗原市教育委員会 2014 『城下遺跡ほか—県営経営体育成基盤整備事業（城下地区）に伴う発掘調査報告書—』 栗原市文化財調査報告書第 18 集

第5章 まとめ

平成24年から3年間の測量調査により、鳥矢ヶ崎古墳群の全体像がほぼ明らかになった。古墳群は東西約250にわたる尾根上と尾根南斜面に39基が確認された。地表面から観察できない古墳も予想されるため、古墳総数は40基を越える可能性が高い。

古墳群の分布は大きく3グループに分かれるようで、グループごとに構成する古墳、分布に特徴がある。第1グループは比較的均質な古墳で構成され、中に密接する複数の古墳があり、血縁関係等の関係を読み取ることも可能かと思われた。また、大型墳1基の周囲に小型墳が集中し、有力者と従う人々の関係が示されている可能性がある。第2グループは古墳群中の中央で、最高所に築かれている。大型墳が最高所付近に集中して築かれ、この地点が鳥矢ヶ崎古墳群の中心で、全体を統括する最も有力な人々の墓である可能性が高い。また、小型、極小古墳の割合も高く、第2グループは鳥矢ヶ崎古墳群を築いた勢力の中で、最も有力な人々と、従う人々の墓を中心に構成されていると見られる。第3グループは4基で中型古墳を中心に構成されている。これらの分布状況は、鳥矢ヶ崎古墳群を営んだ集団の構造と関係している可能性がある。詳細は発掘調査を実施しないと分からないが、鳥矢ヶ崎古墳群を営んだ人々は中心を担う一族（第2グループ）とその他の一族（第1、3グループ）に分かれていたのかもしれない。

さて、昭和46年の発掘調査の報告（栗駒町教育委員会 1972）では、鳥矢ヶ崎古墳群は、1号墳から横穴式石室を模した岩手県域に分布するいわゆる末期古墳に共通する石室が確認されたことと、2号墳から組み合わせ式木棺が出土したことから、北方型蝦夷塚様式と中央型高塚様式の二つを併せ持っていると考えられている。第1号墳の石室は破壊されていることもあり、石室構造は明瞭ではないが、幅がせまく、石室上部から遺体を搬入していた変形した横穴式石室と見ることが可能であろう。岩手県北上市猫谷地古墳群、五条丸古墳群等の石室と類似しており、北方型とみることができよう。一方、2号墳から出土した組合せ式木棺は報告では中央型と位置づけられている。報告書が刊行された昭和47年当時、東北北部の古墳群の様相が十分には把握されていなかったが、その後多くの調査が行われ、末期古墳特に岩手県域北部の末期古墳には木棺が多く用いられていることが判明している。2号墳の木棺の構造や埋納位置は明瞭ではないため確定できないが、第2号墳の木棺もまた北方型である可能性は高いと考えられる。

発掘調査による出土遺物は土師器、須恵器の他2号墳から蕨手刀、刀子、鈔帯金具一式である。他に調査以前に採集された馬具が出土したことが伝えられている。これらのいずれもが北方の末期古墳と共通する品目で、鳥矢ヶ崎古墳群が北方の末期古墳群と共通する様相であることと矛盾しない。中で鈔帯金具は蛇尾を除く帯金具の全体が揃っており、これらの金具は帯に装着された状態で副葬されたこと見られる。周知のように鈔帯金具を装着した帯は律令国家の役人の官服に用いられるものである。熊谷公男氏のご教示によれば、

功労のあった者に与えられることもあるということで、2号墳の被葬者を律令官人と断じることができないが、律令国家と深く関わる人物であったことは認めることができよう。

以上述べてきたように、鳥矢ヶ崎古墳群の全体の様相は東北北部に分布する末期古墳群と同じ特徴を持っており、同様の位置づけをすることが可能であろう。従って、鳥矢ヶ崎古墳群を営んだ人々は、蝦夷と呼ばれる人々と同じ文化をもっていたと考えられよう。ただし、2号墳に葬られた人物には鍔帯金具を装着した帯が副葬されていることを考えれば、鳥矢ヶ崎古墳群を営んだ人々は一方では律令国家と緊密な関係も持っていたことが想定される。鳥矢ヶ崎古墳群の南東約6kmには伊治城跡があり、宝亀十一(780)年に伊治公咎麻呂の乱の舞台となったことはよく知られている。鳥矢ヶ崎古墳群を営んだ北の文化を持ち、律令国家と緊密な関係を持つ人々の姿は、蝦夷を出自とし、律令国家に仕えた伊治公咎麻呂の姿と共通するところが多い。すでに報告書(栗駒町教育委員会 1972)で指摘されているように鳥矢ヶ崎古墳群を築造した人々こそが伊治公咎麻呂の一族であった可能性はきわめて高いと考えられよう。

最後に、鳥矢ヶ崎古墳群の保存状態について述べたい。鳥矢ヶ崎古墳群の保存状態はきわめて良好である。確認できる39基の古墳のうち、多少とも損傷をうけているのはA12、13、16号墳の3基にすぎない。特にB地区の各古墳はほとんど完全な姿で残されている。古墳群の立地する丘陵も本来の地形がそのまま残されている。つまり、景観も含めて鳥矢ヶ崎古墳群は築かれた当時そのままの姿を今に伝えているのである。国指定史跡岩手県北上市江釣子古墳群(猫谷地古墳群、五条丸古墳群)、国指定史跡青森県八戸市丹後平古墳群など著名な古墳群は周辺に開発が進み、当時の景観にはほど遠い状況にある。国指定史跡青森県おいらせ町阿光坊古墳群は現状では唯一古墳群築造当時の姿を残している。阿光坊古墳群は、各古墳の墳丘が低く、緩やかな斜面に築かれる点に特徴があり、東北北部北半の末期古墳を代表する例である。鳥矢ヶ崎古墳群は筆者の知る限る東北北部の中でも律令国家と接する地域に築かれた歴史的に重要な意味を持つ古墳群であり、古墳群の様相はこの地域の古墳群の全体的な姿を今に残す唯一の貴重な古墳群であることは間違いない。地域の方々、鳥矢ヶ崎史跡公園保存会、栗原市教育委員会のこれまでの鳥矢ヶ崎古墳群の保存、整備かけてこられたなみなみならぬ熱意とご努力に心からの敬意を表するとともに、古墳群の重要性と価値をもって国史跡指定にむけての努力をすることを提言したい。

謝 辞

3年にわたる鳥矢ヶ崎古墳群の測量調査にあたり、栗原市教育委員会、鳥矢ヶ崎史跡公園保存会、猿飛来コミュニティセンター、佐藤茂鳥矢ヶ崎史跡公園保存会長、工藤健猿飛来コミュニティセンター運営委員長、栗原市教育委員会千葉長彦氏、大場亜弥氏、安達訓仁氏にご支援、ご協力いただきました。心から御礼申し上げます。